

---

# ハルとスープ。

すがはる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハルとスープ。

### 【Nコード】

N5225T

### 【作者名】

すがはる

### 【あらすじ】

孤児院を追い出されて回りまわってやつとのもので掴み取った夢の”普通”の生活。普通普遍をこよなく愛する少女、ハル。じゃけん？王族？お家騒動？他の国？え、力？なんのこと？ぜひ、見えないどこかで勝手にやってください。わたし、しがない平民なんで！頑固に頑なに意地でも普通を生きようとするちよつと普通じゃない彼女のお話。

## ブローグ

強いていうなら “特殊”

強いていうなら “強靱”

強いていうなら “忠誠”

強いていうなら “賢才”

さらに強いていうなら “冷酷で冷徹”、けれど “冷美”

それがこの王国誰もが知っている彼への賞賛。

強いていうなら “普通”

ああ、さらに強いていうなら “黒髪・黒眼”

もはやどうあがいても、どうがんばってもそれ以上は何も出ない。  
それがこの国で埋もれる民<sup>わたし</sup>の評価。

唯一共通点があるとすれば “普遍”

それが民<sup>わたし</sup>と彼が望むもの。



## プロローグ（後書き）

1話あたり1500〜2000文字程度と少なめを予定しています。  
なるべく気をつけるようにしていますが、誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。

これからよろしく願います。またこのページを開けてくださった方にありがとうございます。

## 1・ハルト、

父親も母親も知らない。

大戦のどさくさに紛れて、生まれたばかりのわたしは最終的に孤児院に辿り着き、最低限の食べ物と最低限の教育と大量の仕事を与えられながら育った。それでも、ここまで生きてこられたのは運がよかったと思う。大戦の中、多くの子供たちが戦火に巻かれ命を落としていった。

どこまでも暗い話だが、相応の暗い時代だったのだと思う。

町は町として機能せず、民は民として生きられず、国は“何か”に躍起になっていたただけだった。

政ごとは詳しくわからないけれど、わたしが生きてきた十数年のうちに他国への進攻は止めたようだ。それとも荒れ果てたこの国を建て直す方が先決だと、遅まきながら利口な判断でもしたのだろうか。兎にも角にも、頭上を轟音とともに行き交う“船”<sup>シップ</sup>という名の戦闘機を随分見ていない。

砂漠に囲まれた王国“ウィザード”。

この国には、この世界に存在する他の4国“アルファ”、“ベータ”、“王龍”、“シーグル”とは違った特殊能力をもった民が存在する。けれど、今では希少な存在だ。

その能力を持たない民の方が少なかったのは遙か昔の話で。他国との幾度にもわたる大戦の末、その能力を持つものは突然変異として生まれる以外になくなり、辿った運命のせいなのか、いつしか忌み嫌われ、公式に認められた存在でありながら奴隷並の扱いとなっていた。

その地位をなんとか引き上げたのは、先代の宰相の決死の尽力に尽きるらしい。

その存在は、この国の名の通り。

魔術師  
“ウィザード”。

と、まあ。

「よつこらせ」

若者に似使わない苦労じみた単語を発しつつ、開いていた分厚い本を閉じる。裏表紙に剥がれかけた『王立図書館所蔵』の金色の印。

「あと一巻で終わりか……」  
なんとなく寂しくなって呟き、膝の上に乗せた可愛げもない黒い

革張りの表紙に感慨深くそつと手を置いた。

『ウィザード歴史大全』全17巻。

実際、可愛げもなにもない。

ただでさえ言語は昔の言い回しだというのに、薄っぺらい用紙に細かな文字。漬物石にしたら1冊でしつかり漬かるくらいに分厚く、普通の本より大きめ。装丁だけ見ても読む前から億劫にさせる。

「あしたお店の後に図書館に寄って借りてこよつと」

これを読み始めたのは、誰も読んでなさそうだから続きを借りるのも待たなくてすみそうだ、と、軽く判断した半年前。すでに意地で読み進めているこの本も、残すところ1巻のみになった。もはやここまでくると、最終的には使命感と達成感のみが目指すところで

なにせ、歴史は全く得意じゃない上に、内容が身近ではない。

わたしは平民だ。

この国のしがない、平和・普通・普遍を愛する一般市民。

一般教養と呼ばれる知識以外で、昔を知ることこの先を読むことも必要はない。

「それにしても……かび臭いな」

ベットから降りると、両手で抱えてよたよたと部屋の一番奥へと戻す。こんなのが枕元にあつたら気難しい夢でも見そうだ、かび臭い歴史の。



「今度はもうちょっと明るい内容にしよう」

ページを捲っていただけに薄黒くなった両手をはたいて、固いベットに丸くなった。冬場は寒々しかった薄い布団もそろそろちようどいい。枕元に手を伸ばし、そこに眼鏡の感触を確認し、すでに船を漕ぎ始めた意識を強制的に動かしてランプを消す。

真っ暗だ。

「おやすみなさい」

その晩、夢を見た。

かび臭い戦闘機<sup>シップ</sup>の貨物倉庫にひっそりと隠れて、見たこともない、本来なら見るはずもない他国へ連れていかれる夢を。

## 1 ハルト、（後書き）

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。

## 2・ハルと神様（1）

朝6時。

王都の商人の朝は早い。

「ハル！ハール！ハル！」

ガランガラン、ガランガラン。

木扉に吊るした来客を告げるベルと同時に、狭い家中に大声が響き渡った。びくりと肩を震わせて、けれど知ったその声に密かに安堵の息をつく。誰にも聞こえないよう小声でそれを呟き、慌てて前掛けで両手を拭いて眼鏡をかけ、来客を迎えるべく台所が出る。

「おい、いないのか、ハル！ハル！届け物だぞー、ハル！」

「……わたしは犬ですか」

ハルの居住区は王都の商人街の外れに位置していた。この町の民は外が明るかろうと暗闇だろうと、日が昇る前から働きたす。貴族ではないのだから、ゆっくりと起きていたら毎日を生活していくためには一日では足りなくなってしまう。彼もまた例外ではなく、例えこんな早朝の訪問でもこの町では許される暗黙の了解があった。

「おはようございます、ダロンさん」

目の前には丸々と太った大きなじゃがいも。

ではなくて、行きつけの市場の店主、ダロン・グランストの姿があった。ヘルシーな野菜や果物を扱っている割にその体軀は丸々と太っていて、毎度のことながら不思議だ。

「お、なんだ、朝っぱらからしけた顔してんなあ」

「……夢見が最悪でして」

彼が開けた扉から近所の朝ごはんの香りが漂っていた。ハルは毎朝この匂いで目覚めるのだが、今朝は残念な“普通あくむとかけ離れた夢”のため、それよりも前に飛び起きて、珍しく朝食の準備を終えたところだった。

「おうよ。ついでだから届けにきたぞ」

「うわあつ、新じゃがじゃないですか！おいしそう」

目の前に差し出された大きな蔓の編みかこの中には、ごろごろと小さめのじゃがいもが無造作に詰まっていた。目を輝かせてひとつ取り上げて、ふと思う。

「あれ？じゃがいも？じゃがいも、頼みましたっけ？」

首を傾げる最中で、無言のうちに頭上に大きな手が乗った。

「……ええと、あの？っていうか、じゃがいも……」

いや、物を置くのに確かにちょうどいい高さなんだろう。 15歳

のこの国の平均身長からしたら150cm未満の背丈は低いだろうし、うん。わからなくはない、そんな適当な解釈をして見上げると  
憐れむような視線が向けられていた。

「ハル、お前……ちゃんと食べてるのか」

「……はい？あ、あの、食べてます」

孤児院時代より遥かに食生活は潤っているはずだ。罰という名の施設の食費浮かしから見たら、朝昼……お金がない時は夜はなしだけれど、かなり普通の生活だと思う。

とはいえ、これはダロンの毎度の定型句だ。毎回苦笑いを返すしかない。小さいときの食生活のせいか、元々の性質か、この体は太ることを知らない。年頃の女の子と比べれば出るべきところが出ず、まあ言ってみれば貧相なんだろう。

「食べてますって！お昼はいつも豪華ですし」

笑って返したのに、じとつとした目で見られた。ある意味、傷つく。

「まあ、あいつところなら心配ないだろうけどさあ。うちのかみさんもいつでも食べに来てって言ってたからな。で、こいつはおまけのオマケ」

そう言ってポケットからなにやら取り出し、じゃがいもの上にコロンと乗せた。

「……へ？」

「ま、これでも食べて元気出せ。じゃがいもは今年は豊作らしいからおまけのお裾分け。それとそっちの隅に頼まれた玉ねぎ置いておいたからなー。それじゃ、まいどー」

早朝の台風は、太い腕を上げ愛嬌のある笑顔で軽やかに去って行った。

「あの、身軽な動きが毎度のことながら不思議なんだけど……」

見てみれば、じゃがいもの方が注文した玉ねぎの量より遙かに多かったが、取りあえず気にしないことにして、ダロンが置いて行った薬包紙に挟まれた小さな物体を手にとった。

## 2 ハルと神様（1）（後書き）

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。読んでくださってありがとうございます！

### 3 ハルと神様（2）

「これって」

菓包紙から出てきた可愛いピンク色に目を奪われた。

「……カロン」

持っているだけでも壊れてしまいそうなほど軽いそれに、ちょっとした感動を覚えた。

「マ、マカロンだ……」

数日前、貴族街で流行っているお菓子が商人街でも売られることになったと聞いて、興味津々に開店したお店に向かった。初日だったからか、お店の前は商人街に住む女子が全員並んでるんじゃないかと思うくらいの大行列。例の本を持っていたこともあつて並ばなかったが、それでもどんなものか見てみたくて、お兄さんが試食に配っているマカロン（断片だけど）のカゴをそつと見てみたのだ。

うん。断片すぎてよくわからない。

「マカロン」

ベツトに移動し、マカロンをそつと摘む。  
うつとりとしばらく鑑賞。



「うふふ……これが、マツカロン」

軽く表面をつついてみたり。  
鼻を近づけてみたり。

「ベリーの匂い。あ、ベリーが練り込んであるのか。で、挟んであるのは何かなー……」

解体。

瞬間、ハルは目を輝かせた。

「チョコレートっ！」

大好きだ。

大好物だ。

目に入れても痛くないくらい。

貧乏人のわたしには滅多に口にはできない代物で。

うん。

幸せすぎる……このお菓子。  
マカロン

「さてと」

十分、見た目を堪能して、ベットのの上に居住まいを正した。きつと奥さんが持たせたのだらう。ダロンがお店で買っている姿は想像できない。甘いものに目がなさそうな気もするが、多分、そこまでやらないだろう。……やらないと思いたい。

孤児院出身だからといって偏見を向けず、ダロン夫妻には何かとお世話になっている。わたしは幸運だ。

こうやって気にかけてくれるひとがいるのは、正直、嬉しい。分厚いメガネの奥の深く、深い漆黒の瞳を細めた。

「それでは、遠慮なくいただきます」

ハル。

それが顔も知らない両親がつけた名前。

孤児院に辿り着いたとき、それがお包みに刺繍されていたらしい。実際には孤児院のシスターの名前が付くけれど、平民だから必要にはならない。

孤児院は13歳になると強制的に追い出され、ひとりで生活をし

ていかなければならない。

成人は法律で16歳と決められているが、成人に満たない小さな子を放り出しても問題にならないのは、院にいる間に手に職がつくように訓練されているし、望めば職の斡旋してもらえるから。たとえば、そこに処遇の善し悪しに問題があるとしても。

院でやった仕事の内で一番料理が好きだった。そして、料理というほどの料理はなくても質素な食生活の中、必ずそこにはスープがあった。最低限の食材で栄養のある食事を摂るには一番手っ取り早く、安上がり。できるだけ味が重ならないように、それでいて食材を大事に余すことのないように作る。その作業が好きだった。

だからわたしは料理人を選んだ。

けれど。

外に出てから知る。

この国の料理人には肩書きという信用が必要だった。せめて普通の平民である、そんな肩書きが。どこの誰かもわからない人間に自分が口にするものを作ってもらいたくないのだろう。

つまり、それは偏見で。

この手は汚れてなどいないのに。

わたしには“普通”という自由がない。

ただ、この国の戦火に巻かれ、孤児になっただけだということに。きつと、これから先も付いて回るのだろう。偏見が。

職にありつけるはずもなく、持たされた最後のお金で何か口に入るものをと市場でウロウロしていた。何日も歩き続けて疲弊して、

すでに意識は朦朧としていて。

「おいで」

あのひとことが神様の言葉だった。

あの覗きこまれたときに見た、心配そうなダロン夫妻の表情が今でも忘れられない。

涙がとめどなく流れ、今度は困ったように苦笑いして。ふたりに温かい食事をもらって。

きつと、父と母がいたらこんな感じなんだろうと思った。

だから。

ダロン夫妻は神様だ。

そしてもうひとり、神様がいる。

……ちよつとばかり変わった神様が。

### 3 ハルと神様(2) (後書き)

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。読んでくださってありがとうございます。

#### 4・ハルと神様(3)

基本的にこの国の建物の壁は漆喰だ。商人街は荒い粒子の薄い生  
成り色、王城に近付くにつれて色は白くきめ細やかになっていく。  
多少、戦火の爪痕は残るが王都内はほぼ復興し、整然とした街並み  
が続く。

商人街の居住区である細い裏路地を抜けて馬車道へ。やっと整備  
された石畳の道に出て少し緊張感をほぐし、しばらく三輪車を漕ぎ  
進める。前のカゴに置いた寸胴鍋が揺れるたびにチャプリチャプリ  
と横に揺れた。

今日は特に揺れが激しい。

「うわっ。こぼれるなーこぼれるなー」

朝の清々しい雰囲気の中、呪いのように眩き、鍋を凝視。それで  
も突然現れる石畳の割れ目を余裕で交わすのは慣れた道だからでき  
ることだ。

「よし。無事」

最後まで気を抜かないよう、赤い扉の二階建てのお店の前でゆっ  
くりと三輪車を止めた。

いつものように荷台から寸胴鍋を両手で抱えて、色鮮やかなナス  
タチウムの鉢が両サイドに置かれた灰色の石階段を数段上る。真っ  
赤な扉を開けると同時にベルが鳴り響いた。

「リジー、おはようございますっ」

一年前なら重い荷物に「ぜえはあ」が付加されたが、体力も筋力もそれなりについたらしい。息ひとつ乱れずに『大きな声で元氣よく挨拶』をする。

けれど、太陽が差し込み始めたそこに人影はなかった。

「……あれ、奥かな」

特段気にせず、とりあえず定位置の暖炉の上に寸胴鍋を運び込む。

「本、本っと」

置きっぱなしにしていた本を取って戻り。  
やっぱり、そこに見知った顔はなかった。

「あれ？ベルが鳴れば出てくるんだけどなあ、リジー」

店舗兼住宅。奥には作業部屋と貯蔵庫があり、二階にはこの店の主の部屋がある。ハルが訪ねてくるこの時間には大体、彼女はここにて作業をしている。奥にも作業部屋が続いているからそっちに  
いるのかもしれない。

「……そういえば」

よく考えてみれば、この時間にこの店が静まり返っているのがおかしい。いつもは薪のはじける音がなかったか。

「……そういえば」

さらによく考えてみれば、なぜ、するべき香りがしない？  
壁の時計を確認。

「10時きっかり。出勤時間だし……リジー？」

いやな予感が過ぎり、店内を奥へと足早に進む。

まさか、強盗とか？

店内は昨日、掃除して帰ったときそのまま綺麗そのものだった。

まさか、病気とか。

不意に住居区画となっている二階を見上げる。

いやいやいや、昨日は健康体そのものだった。ビールがどうのこ  
うの言ってたし。

ああ。  
でも。

どうか、空の上の见えない神様。  
どうかどうかどうか、わたしの恩人<sup>かみさま</sup>にひどいことをしないでくだ  
さい。

「リジッ！」

奥の作業部屋に続く扉を勢いよく開いた。



そこに、いた。

変態……

もとい酵母菌中毒者が。

「げ」

それが目に入った瞬間、  
あぁ、何が強盗だ。  
何がつくりと頂垂れた。  
何が病気だ。

神様、ごめんなさい。

「リジ……ああああ。そうか、今日は月に1回の酵母菌育成の日だったんだ……」

いい加減、慣れたその光景に早々に声を掛けるのを諦めた。

ハルの存在に全く気付く様子もなく、ほどほどに太陽光の入る適温のキッチンの隅でうつとりと並んだ瓶を見つめている金髪の美女。

リジー・グランスト。

市場のダロンのれっきとした実妹。3拍子揃ったプロポーションに明るくおおらかで、とりわけ優しい。この辺りで彼女を知らない人間はいない。もちろん、誰にでも好かれる彼女だが。

「<sup>へんたい</sup>酵母菌中毒者じゃなければな……」

異性の影はなく。ハルにしてみればこの店に出入りするのが気楽だが、彼女の今後が心配になってしまふ。余計なことなんだろうけれど。

「まあ、いいや。とりあえずパンを焼かなきゃ……」

ふう、とため息をひとつ。

踵を返した肩越しから「ふふふ、早く大きくなるのよー」、そんなうっとりするような美声が聞こえてきた。

## 5・ハルと神様（4）

「そろそろかな」

すでにリジーの手によって発酵と整形が終わっていた。こう、2、3か月同じことが続くと、やっぱり暗黙の了解のうちに、月に一度の酵母菌育成日は焼かせてもらえることになっているらしい。信用されているのは嬉しくてたまらないけど、せめて前日に言っておいてくれればとも思う。いや、普通言うよね？

釜の中からきつね色に焼けたバケットを取り出し、熱さがミトンに沁みる前に木箱へと移動させる。熱が冷めないうちに次の種を釜の中に入れて、一息ついた。

「でも、でしゃばっちゃいけない。きつとこういうもの。リジーが言い忘れているだけののような気もするけど、師弟関係なんだから。うん、そうそう」

そう思うのは、まだ自分が”普通”だという自信がないからだ。こだわるのもおかしいだろうけど。「偏見を恐れている？今さら」自嘲気味に笑い、床の木目を見つめた。

身長170cm細身で抜群の体躯。太陽のように燦々と輝くブロンドの髪。澄ましたように整った顔。初めてリジーと会ったとき、わたしが作ったスープを一口食べて、何故か目の前で仁王立ちされて、なんとなく数歩後退してしまった。

『ね、わたしんとこ来ない?』

「は?」思わず出そうになった声を咄嗟に飲み込んで、気が付いたら彼女は人懐こい笑顔を向けていた。

『うちで働かない?』

『おいで』と言目に声をかけたダロンさんと同じ血が流れてるんだなと妙に納得した。

リジーは、王城の許可を得た”普通以上の調理師”だ。彼女ならば貴族街でも働くことができる。ハルにとっては夢のまた夢。生まれ変わるまでありえない。なのに。

『わたしパン屋なんだけど、絶対合うと思う。ハルのスープ』

なのに、そんなリジーは即決した。  
いとも簡単に。

三言目には昔からの知り合いのように『ハル』と呼び、ダロンさんがその突拍子もない申し出に苦笑いしていたけれど、第一印象で恐れていた差し出された手をそっととった。

『よろしくね、ハル』

決して、その手は貴族のような手ではなかった。荒れていて、ああ、ここにくるまでにどれだけ努力したんだろうと、そう不意に思えるような力強い手だった。

わたしの、スープ。

「……冷えてるといいんだけど」

井戸水で冷えた鍋の蓋を取ると、なみなみと白い表面が揺れた。  
大丈夫そうだ。

「今日は冷製のスープ？おはよ、ハル。早いねー」

顔を上げると、笑顔でリジーが立っていた。さっきまでの酵母菌<sup>か</sup>  
中毒者<sup>わり</sup>つぷりは全くない。

「おいしそー」

金色のウェーブの髪をひとつにまとめてから、腰をたたむように  
して鍋を覗き込む。細身のパンツに半袖のシャツ。彼女がああ風船  
のようなダロンさんの妹だとはいまだに信じがたい。

「おはようございます、リジー。今朝、ダロンさんがジャガイモを  
たくさん持ってきてくださったので」

説明をしながら、リジーが持参したマグカップに濃く綺麗な白色  
のスープを注ぐ。

「急遽、ヴィシソワーズにしてみました。どうぞ」  
「いただきます!」

嬉しそうにマグカップを傾けるリジーに自然に口元が綻んだ。こ  
うして何も疑われずに自分が作ったものを口にしてもらえる日が来  
るとは、思いもしなかった。

「おいしー!!」

「よかったです」

「これ、好き!毎日これにしない?おいしー」

「……それはどうかと」

「えー、えー……じゃあさー、ねえ、ハル」

なんて首をかしげる。

「どうぞ。多めにあるんで」

リジーの手元からカップを受け取り、なみなみと注ぐ。

「えへへ。いただきます!」

きつと、今日も良い日になる。

パンの焼ける優しい香りに満たされて、ハルも笑った。

『リジーのパンとスープのお店』

赤い扉を開けて、こんがりと焼けたプールとスープの形が彫られた看板を下げた。すでにナスタチウムの階段下に常連のおじさんの顔があつた。

「ハルちゃん、今日はなに？」

「いらつしやいませ。今日は白パンとジャガイモのヴィシソワーズのスープです」

少し先にある広場の時計塔の針が間もなく12時を指そうとして  
いる。

いつもの常連さんたちが次々とお店に入っていく、パンとスープ  
を買って出ていく。

慌ただしい時間が始まつた。

ここからあの時計が14時を指すまでは、戦場といつても過言じ  
やない。もともとリジীরパンは人気があつて、ランチの時間だけ  
スープをつけるようにしたら、さらにお客さんがたくさん増えたら  
しい。

よかった。リジীর役に立って。

すべては神様<sup>リジール</sup>のために。



## 5 ハルと神様(4) (後書き)

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。読んでくださってありがとうございます。

## 6 ハルと神様（5）

14時。

お客さんが一区切りついたところで看板を裏返し、一旦、お店を閉めた。後は、リジーと契約をしている宿屋やレストランなどが注文分を取りに来るだけだから、ハルの一日の仕事はそこで終わる。

「からっぽ、よかった」

ヴィシソワーズは中々好評で早々となくなってしまった。他の野菜で冷たいスープもいいかも、なんて考えながら三輪車の荷台に積み込んでいると、リジーが階段を駆け下りて来るのが見えた。

「ハル、おつかれー！で、はい、いつもの！……っていうか、いつもで悪いけど」

「ありがとうございます。リジーのパンは美味しいから、いくつでもいただけるのは嬉しいです」

紙袋に溢れるほど詰められたバケットと胚芽パン。灰かに温かい紙袋を受け取り、前の荷台の隅に入れる。リジーのパンはハルの食事の中心だ。これからお昼を食べて、夜を食べて、そして朝を食べる……。

「あと、これはちょっと買いすぎちゃったから。お裾分けね」

リジーはそう言つて、茶封筒を数袋、荷台にそそくさと入れる。疑問符を浮かべていると苦笑いしながら「家で開けて？絶対」。どこか拒否できない口調で言われて「ありがとうございます」素直に頷いた。

「あ。これ」

何故か苦々しい顔をしたリジーの視線は寸胴鍋の横にぎゅちりと置かれた『ウィザード歴史大全16巻』に向いていた。

「ああ、今日、図書館に返却に行こうと思つてて」

「本が好きなのはいいことだと思うけどさあ……なんていうか、もつとおもしろいのあつたでしょ。酵母菌の歴史とか、酵母菌の種類とか、酵母菌の育成の仕方とか、酵母菌の世界とか……」

……おもしろいのか。

つていうか、リジーの目があやしげに輝いてきた。

「リジー！リ・ジ・イツ」

「はっ……え、えへへ？」

そこまで酵母菌が好きな理由を聞いてみたい気もする。けれど、それが世界の終りさえ示しているようでハルにはまだ聞くことができないでいる。

「ほ、ほら。酵母菌じゃなくてもさあ。小説とか、そうそう！騎士様と庶民との憧れのロマンスとかっ」

どうやら、今まで知らなかったけれどリジーは色々両極端らしい。騎士様とのロマンスはさておいて、確かに、酵母菌については職

業柄知っていた方がよさそうだけど、そこまで突っ込んだ世界じゃなくても良い気もする。いつまでも『酵母菌の〜』が出てきそうだったので、慌てて三輪車に乗る。

「あと1冊なんで、なんていうか使命感から読んでるので、次の本は参考にしますね」

「うんうん。酵母菌とロマンス小説は任せて」

「多分」心の中で一言付け加えてペダルを漕ぐ足に力を入れた。

「おつかれさまでした。お先に失礼します」

「うん。またあしたねー」

リジーは笑顔で手をぶんぶんと大きく振っている。また明日、すぐに会うのにと苦笑しながら、それでも嬉しく思う。会つのを楽しみにしてくれているひとがいる、そんな”普通”に。

深緑のサルエルパンツに生成の長袖のブラウス。どちらかといえば、男の子。身軽に動けるし、なにより気に入ってる。黒く長い髪を三つ編みにして、分厚い瓶底めがねを掛けて。それがいつもの格好。

でも、若干、気が重い。

王立図書館は貴族街にあるから余計だ。

白いレースのブラウスに踝丈のフワリとしたシフォンスカート。

綺麗な赤銅色やリジーのようなブロンドの長い髪を後ろでキュツとバレッタで留めて。薄く化粧を施し、きつとすれ違う時に香ったのは流行の香水なんだろう。それが町の同じ年頃の女の子たちのいつもの格好。

外見に気を使うお金はないし。そもそもわたしは目立つ必要はない。

「気にしてないけど、ないけど、ないけど、……っはあ」

けれど。

一応、年頃の女の子なわけで。  
可愛いものも。綺麗なものも。甘いものも。

やっぱり好きなわけで。

きつと、わたしは視界にも入っていないに違いない、すれ違った子から香る『甘い女の子の香り』を横目で見つつ、ため息をひとつ。

「いつかあんな服着てみたいなあ」

清楚な白色のワンピースへの意識を断ち切るように、寸胴鍋と『ウィザード歴史大全16巻』を乗せた三輪車を飛ばした。

## 6 ハルと神様(5) (後書き)

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。

そろそろ展開していきたい！です。今回も読んでくださってありがとうございます。

## 7・ハルと神様（6）

宮殿並の大きさの歴史的建築物、王立図書館。

元々は王家のお屋敷のひとつだったらしい。その王家が所有していた蔵書のひとつであるウィザード大全によると。

それを知ってからよくよく見れば、どこぞの神殿かと思わせる白亜の二本柱には王家の紋章である薔薇の彫刻がなされ、入口のホールは床に大理石、天井にステンドグラス。図書館にしては華美だと言わざるを得ない。

その奥、さらに奥、そしてさらに奥深く。人気はなく、少々かび臭い書籍が天井まで届く書棚に整然と並んでいた。決して、読まれることを拒んでいるわけではないのに、周辺の書棚は寸分の隙間もなく辞書のような分厚い本がぎゅちりと詰まっている。抜き出すのも一苦労だ。

「……はあっ！？え？ええええ……」

そんな奥深くから端的な驚嘆の叫びと、それでいて哀愁漂う声が上がった。

けれど、あまりに奥深く過ぎて図書館内の誰も気付かない。

「な、なんで」

その当人、ハルはどちらかといえば当惑していた。

「あ、アリエナイ」

片言になるほど。

目の前の本棚、ぽつかりと空いた2冊分。

1冊はさっき返却したばかりの16巻。

そこに。

ウィザード大全最終巻17巻はなかった。

ただそれだけのことで。けれど、それほどのことだ。

いや、図書館なんだから貸し出し中なだけなのだろうけれど、この本に限って今までそんなこと一度もなかったのだ。しかも、それを見越して読み始めたのに。場所を移動されているのかと周辺を探しても、1巻から15巻までは揃っているのにやはり17巻がない。

「うう……」

項垂れた。本気で泣けてくる。

とりあえず、そそくさと入り口の貸し出し窓口まで戻り、管理のお姉さんに尋ねる。もしかしたら返却されたばかりで元の位置に戻されていないのかもしれない。そんな淡い期待を抱いて。

「貸し出し中ですね」

もろくも崩れた。

「あ」

管理のお姉さんの声に、ぱつと目を輝かせ顔を上げる。微妙に苦



笑っているお姉さんを視界にいれながら次の言葉を待つ。

「ああ、いえ。申し訳ないのですが、17巻は臨時延長手続きが取られておりますので、最長であと一カ月は返却になりません」

そんな難しいことではないのに、浸透するのに数秒かった。

「あの、お嬢さん？」

「……は？」

「あのー。ですので、昨日の貸し出しで、その際にすでに延長手続きがとられておりますので」

「……なっ」

「え？」

「どんな奇特なひとが借りていったんですかつ！あれを読む人なんているわけないじゃないですか！」

自分のことは完全に棚上げ。

「いえ、あの。そう言われましても……お貸出先のことは個人のことでですので、お話しすることはできませんし。ですので……」

最後にはにこやかな笑顔で返された。

「申し訳ございませんが、17巻のお貸出は来月となります」

そうして。

夜。

ハルの手元には分厚めの小説が乗っていた。

『愛しき小さな薔薇』

「くさっ」

本のタイトルが。

やけっぱちだ。借りられるはずのない本がなくて、さらには貸し出し延長までされているとなると、きつとんでもなく読むのが遅いに違いない。もしかしたらあの厚さだ、枕にでもするつもりかもしれない。決して内容を欲して借りたのだという結論には辿りつかず。

「むむむむむ……」

考え出したらなんだか無性に悔しくなってきた、ので。

女性の間でベストセラーになっているというこの”ロマンス小説”を借りてきた。しかも、延長手続きもとった。若干、気恥かしかったけれど。

なんにしろ、元々読むジャンルは雑多なので、本を手に入れば必然的にわくわくする。

「ええと、薔薇の宮殿に住む悲しきサダメを持った美しい王子と孤独な優しき少女のラブロマンス！……ヴだよ、ヴ。……なんとなく

ありがちな設定」

あまりの典型的な文句（ハルが思うところの）と、変なところに突っ込みをいれながらも、表紙を開く。

すでに5冊ほど出ているのでしばらくはこのラヴロマンスにお世話になるのか、そんなことを考えながら、結局、朝方まで読み続けるのだった。

## 7 ハルと神様(6) (後書き)

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。今回も読んでくださってありがとうございます。次に一本、閑話をはさみ、本編「ハルと〇〇〇」に続きます。

閑話（前書き）

リジー目線で1話。

## 閑話

年齢の割に小柄で、化粧つ気もなく、素直で。律儀で実直で。良くも悪くも、時に頑なに。

サルエルパンツに質素な長袖のブラウス。

黒く長いストレートの髪を両肩に三つ編みにして、分厚い瓶底めがねをかける。

深い瞳の奥。

それはどこか、何かを押し隠すように。

不意に見せるその笑顔は私たちを幸せにしてくれるというのに。

そして、しがみつくように”普通”を愛している。

それが彼女<sup>ハル</sup>。

「ええと、トマトとかぼちゃと……兄さん！」

八百屋なのはどうしたらあかも丸くなれるものか、いつも不思議だ。風船のように丸い体を起して私の声に振り返った。

「リジー、来てたのか」

「結構前からね」

小さな露店だというのに、巨体を身軽に動かしてすぐに近くにやつてきた実兄タロンに苦笑いし、紙袋を差し出す。

「はい、頼まれたやつ」

週に二、三度、仕入れがてらパンを届けに来ている。

「ああ、ありがとう。ところでハルはどうだ？」

それにも苦笑した。いつも二言目には実の妹の近況よりも、彼女ハルのことだ。きつと子供のいない兄夫婦は彼女を実の子どものように思っているに違いない。

「元気よ。パンを焼くのも随分慣れてきたし、いつでもお店を任せられるわ」

「そうか。元気ならいいんだ」

何気ない会話をしながら、店で必要なものを揃えていく。夕方過ぎだからお客もまばらでダロンは仕入れに付き合ってくれる。

「リジー。そういえば、いつもの行商がサンプルにスパイス置いて行ったから、持ってくるか？」

「あ、うん。いくらでも」

その辺りは料理人のプライドだ。お店では使わないかもしれないが、美味しい物、より美味しくするものへの探求心は永遠にある。店の奥から出してきたいくつかの茶封筒を受け取り中身を確認する。

「あ、月桂樹」

香りが強い。乾燥した小指サイズの葉っぱが何枚が入っていた。

「こっちは黒胡椒の粒に、乾燥パセリ。で、押麦。……兄さん」

次に私が言いたい言葉を察したらしい。

「ハルにな」

「でしょうね」

多少呆れもしたけど。この封筒の中身は、彼女への愛情に違いない。<sup>スパイス</sup>

だって。きっと。

彼女が愛情たっぷりスープを作ってくれるから、さらに。絶対、美味しくなる。

市場からの帰り道、ポケットにスパイスの小袋を詰め込んで本日最後の苦笑い。

「スパイス中毒者には、絶対家に帰ってから開けるように言わなくちゃ」



自分のことは棚に上げ。

リジーからそれを受け取ったハルは、開けるなり目を輝かせ、いそいそと小瓶に分ける。

案の定、次の日の朝、ダロンが尋ねるまでうつとりと小瓶を見つめていたらしい。と聞いたのは、心配しきったダロンがリジーの店に駆け込んできてからのこと。

## 閑話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

## 8・ハルと花待ちのひと（1）

ウィザード  
魔術師。

何かを呼ぶような、どこからか、呪われたような低い声が聞こえた。

「いやあああああつつつ！！！！！！」

静かな町中に掠れた悲鳴が通り抜けて行つた。  
漆黒の長い髪を今は下ろし、荒く呼吸を繰り返す。

「あ、ありえない……こんな、こんな」

茫然と呟く。

すぐに呼吸を整えると寝巻の木綿のワンピースを引き摺るように立ち上がる。古くなつた床板が軋んだ。

「こ、こんな夢を見るなんて……なにが魔術師ウィザードよ！え、縁起でもないっ！普通の人はそんな夢見ないっのっ！」

朝焼けの差し込む部屋でハルは朝っぱらから吠えるのだった。

「わたしは普通。わたしは普通。今日は普通。普通こそ命……」

知らない人が見たら明らかに怪しいが、背にも腹にも変えられない。急ぎ”普通のひとが見ないような夢”を取っ払わなければいけないのだ。

ただの夢。悪夢だけれど。  
されど。

夢。

まあ、後で隣の家から慌てておばちゃんの様子を窺いに来て、若干、説教されたけれど。

「お金よーし。お昼よーし」

今日は仕事は休みだ。どうせ開けていてもお客は入らないと、リジーいわく、毎年休みなそうで。バスケットにお昼を詰めて、いつもより多めのコインを入れた財布変わりの小袋を首から掛ける。

「めがねよーし。服装よーし」

玄関先に置きっぱなしにしていた分厚いめがねを掛け、一応、変わり映えのしない服装チェック。仕事じゃないので今日はサンダルに、長い髪は背中ですとつにまとめただけだ。兎にも角にも、目立たず、目立ちすぎず。平凡に。

「よし。んじゃ、いってきます」

心なしかわくわくしながら、誰もいない薄暗い家を後にした。

『はなまつり  
王国祭』

それはこの王国の建国祭。

『はなまつり』と呼ばれるのは、建国したときから続く現王家の紋章が、薔薇であることからだ。ちなみに薔薇に限らずとも花の名前を持つものは、王家に近い者とされ、現に貴族たちもそれぞれ花の名前を持つ。

ウィザード歴史大全15巻王家年表によると。

現時点で王位第一継承権を持つアルバータ殿下。

第二王子、イルルージュ殿下。

第一王女、ウィミィ殿下。

第二王女、エル殿下。

これが正妃の子どもたち。そして、現王には側妃がひとりいる。アルバータ殿下と同じ年齢の異母兄弟、シュネーリヒト殿下。どうやら、このあたりが王位継承権に「現時点」と付記されている所以なのだろう。一応、正妃の先に生まれた王子がこの国の法に則って必然的に権利を持っているわけだけど、重鎮の中では派閥があるらしい。

側妃の方が正妃より実家の位が高いとか、現王のご寵愛を受けているとか……。

「ふうん。この国を平和にこのまま保ってくれる王ならば、どちらでも私はいいけれど」

すれ違った人たちが花を咲かせた噂話に、ハルは感想を漏らしつつ、目的地へと急ぐ。早くしなければ開店時間に間に合わない。

王家なんてこの国のただの民が関わるわけがないのだ。

随分近くに見え始めた白亜の城壁と細やかな造りの城を見た。あの中に住まう人間などハルには想像することさえ無駄だと思える。彼らは、ウィザード歴史大全の中だけの文章のみで示される人物なのだ。内情がどうであれ、この国の民に結果的に必要なのは”持続的平和”、それに尽きる。

「あ！」

視界の片隅にその店をとらえ、ハルは走り出した。

とにかく。

今はあの店へ急がなければならないのだから。

はなまつり  
王国祭Ⅱ王家。

王家Ⅱ建国祭。

建国祭Ⅱ露店。

露店Ⅱ欲しいものが安く買える。

つまり、はなまつり  
王国祭Ⅱ欲しいものが安く買える。

……しがない庶民ですから。

ええ、なんとも言うってください。



## 9 ハルと花待ちのひと(2)

「うふふ……」

心の中で呟いたはずの浮足立った声は、どうやら外に漏れていたらしい。両隣で真剣に品定めをしていたダンディーなおじさま方の肩がびくりと震えた。

活気に満ち溢れた、露店が所狭しと立ち並んでいる。賑わう露店は、このまま真つ直ぐ、この国の中央部に位置する白亜の城壁まで続いている。各地の名産品や食べ物。これからお昼に近付くにつれ次第に良い匂いが漂ってくるはずだ。

そんな中、雨除けの簡単なテントが張られただけの、どちらかといえば物静かな店にハルはいた。

目の前の板を組み合わせただけの簡素な棚には、古本が押し込まれている。奥には古本が大量に積み上げられている。

つまり、古本屋。

印刷技術が発達した今でも、新品の本ならば、ハルの給料で一生に手に入られる冊数は限られている。その点、露店は穴場で、古本の通常価格よりさらに安価。元は貴族が所有し、図書館に寄付をしたものが重複や程度の良し悪しで仕訳され、流れてきているから、滅多にお目にかかれない掘り出し物も存在する。



「うふふ……」

だから、きよろきよると、必然的にこうなる。

やっぱり気に入った本は、自分の物にしたい。何かしらのお祭りには必ず出店する古本の露店を朝一でチェックするのがハルの楽しみだ。

「やはり花祭りは規模が違うなあ。ええと」

一応、ジャンルごとに場所が分かれているらしく、お目当ての『料理・食材』コーナーへと移動する。歴史書や子供向けのコーナーから比べればかなり小さめで人気がなかった。それならばと片っぱしから順に取り出し、一冊一冊目を通していく。古本はこれができるから嬉しい。

「これは見たことがないなあ。南の料理」

開くと、はじめにハルが見たことのないスパイスの説明が、綺麗なイラストとともにある。イラストの解説が終わると、一気に学問のような小さな文字が並ぶページになった。薄い紙をペラリペラりと捲っていく。

「ふうん」、「へえ」呟きながら斜め読み。数ページ捲ってから背表紙で金額を確認し、棚に戻さず、片手に抱えて次の本へ移動する。数年前からのお気に入りこの古本屋は、料金設定が三段階とわかりやすい。

しばらくして、気になる本を数冊手にして睨むように見比べた。

「第一印象って大事だよな」

以前に見たことがある似たような内容の本をさつさと戻していき、最後まで残った小さな書籍と最初に手に取った『南の料理』を持ち、次のブースへ移動した。

次のブースは意外に混んでいた。

「……だよねえ。いつも何故か混んでる」

ちよつと”ひと癖のありそうなひと”たちが、真剣に立ち読みをしている。そのブースは異様な空気が覆っていて、それを見ただけで回れ右をしたいところだが、仕方ない。ここは実際、ハルにとつて一番必要としているブースだ。本人がどれほど毛嫌いしているようにとも、これは本人の意思には関係ない。

「っ、はあ」

小さく、本当に小さくため息を吐いただけなのに、周囲の”ひと癖ありそうなひとたち”が、一気に振り返り、ハルを睨みつけた。一層、ため息をつきなくなるが、見なかったことにした。

さつさと立ち去るべく、彼らの隙間から本棚に詰められた本のタイトルのみをざっと見ていく。気持ちとは裏腹にその目は今までで一番真剣だ。

よりによって辞書並の分厚さの数冊を手に取り、取った瞬間、周りの視線が一層強いものになったが、やはりなかったことにして、中身も確認せず、迷わずそのブースを抜け出す。

間違いなく、あのブースの”ひと癖ありそうなひとたち”の視線は自分に集中していると、背中を突き刺すような幾多の視線で感じた。

「普通ですから、気にしないでください」

誰に言うでもなく呟いて、小走りに会計所へ駆け込んだ。

全て金額がみえるように裏返しにし、タイトルを確認できないようにする。

一見、親切そうで実は自分本位だ。

『南の料理』

『魔術19』

『古代魔術考査5』

『術と式』

『スパイス図鑑』

それは、どうしてもありえない”普通”。

## 9 ハルと花待ちのひと(2) (後書き)

誤字・脱字などありましたら感想等でお知らせ下さい。今回も読んでくださってありがとうございます。

## 10・ハルと花待ちのひと(3)

取り急ぎ、物騒なタイトルの本をバスケットにしまい、さっさと布で覆<sup>かくし</sup>った。

足早に次に向かったのは、行商が出す穀物の露店だ。

所狭しと置かれている商品は、明らかに周りの果物や野菜が籠に盛り上げられた店とは違う。

並ぶガラス瓶。

瓶、瓶、そして瓶。甕。積み上げられた麻袋。

「すみません」

まだ品出しの途中なのか、奥を行き来する店主に声を掛けると、振り返ったのはどこかダロンに似た笑顔の男だった。

「いらっしやい」

「あの、押麦、ありますか」

「押麦？あるよ。ちよつと待ってなー、業務用じゃなくていいんだろ？」

「はい」

「待て待て、どこに置いたかな……」

奥に入って行ってしまったので、しばらくかかりそうだと判断し、近場の大きい瓶を覗いてみる。

「スペルト小麦だ。リジーのお店にもあったな。こっちは……」

並んだ瓶の中にはキビ、粟、ヒエなど雑穀と豆類も多種あった。店頭をざっと見ただけでもハルの知らないものばかりだ。

地味に色とりどりの小さなプチプチ。実は、リジーが酵母菌中毒のように、ハルもまた他人のことは言えないわけ。

「リジーに比べれば、中毒者っぷりはまだまだけど」と、自分で思っている辺りが怪しい。

つい、この間、リジーから『必ず家で開けて』と言われた小袋にはスパイスが入っていて、その様相の可愛さに、時を忘れて一晩中眺めていたのだ。納品に来たダロンに見えられ、早朝から叩き起された呆れ顔のリジーに軽く小突かれるまで。

「これ、かわいい……」

呟いて、手のひらサイズの小瓶を持ち上げた。乳白色のゴツゴツの豆が入っている。

「……やん、お嬢ちゃんっ！ほら、あったぞ！」

「ひっ、あっ」

不意に呼ばれて意識を戻すと、透明なガラス瓶越しに、丸々とした顔立ちのちよび髭のおじさんの顔があった。

「ち、近い……。驚いた」

「ん？ガルバンゾーだな。好きなのか、お嬢ちゃん」

「ガルバ……すみません。初めて見たので」

「ああ」と頷いて、店主は押麦と適当に記した麻袋をハルに渡し、ハルの瓶を受け取る。

「南の方ではよくスープにいれて食べるんだけどなあ。ヒョコッっていうんだ」

「ひ、よこ」

小瓶から数粒出してハルに渡す。

「ひよこっばいから」

じつと見つめる。

一粒持ち上げて近づけてみる。

それこそ頬を赤く染め、分厚いめがねのその奥で穴があきそうなほど見つめて。

「……っ、かわいいっっっ！」

「は？」

「おじさんっ、これ、スープに入れるんですか！」

「は、ああ。うちの母ちゃんはよく……」

今までにない勢いでハルは店主の両肩を掴む。

「……お、嬢ちゃん？」

後に店主は語る。

「それで、その奥様はどちらに!？」

間違つて、ひよこ豆のごとく、取って食われそうだったと。

花祭りは3日3晩夜通し行われる。

「奥様にひよこの使い方を習う！」

ハルは今にも鼻歌を歌い出しそうなほど満面の笑みでお店を後にした。

ひよこ豆のスープを教えてくれと、その情熱（途中から見世物化していた）に根負けした店主は、帰って来た奥様に事の次第を話し、難なく了承を得た。花祭りが終わった次の日には出立してしまうので、その午前中ならばと快諾してくれたのだ。

「えへへ」

正直に嬉しかった。差別なく、親切にされること。

何よりも。

何よりも。



人とのつながりは大切にしたいと思う。

今までなかったからこそ。

「カミユさん、カミユさん」

忘れないように奥様しやうの名前をインプットして、お店を出るときに何故か「お駄賃」と渡された、薄緑色のマカロンと赤い実が数本入ったガラス瓶を交互に見つめた。

「お駄賃……」

カミユさんの発想はダロンと変わらないのだろう。自分の体形を見直して、ため息をつく。

「いつか格好いい女になるもん、リジーみたいな」

そつとバスケットに入れる。

本、押麦、おひる、小瓶。今にも底が抜けそうだ。

「さつ、おひる、おひる」

慣れないスキップに自らの足を取られそうになりながらも、いつもの場所へと向かった。

## 10・ハルと花待ちのひと(3)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

## 11・ハルと花待ちのひと(4)

それに気がついたのは、花祭りが行われているメイン通りから外れた小道に入ってすぐのことだった。

お店が休みのときには必ず、図書館で借りた本か何度も読み返すほど気にいつている本か、兎にも角にも一冊の厚めの本と、リジールのパンで作ったサンドウィッチとスープをバスケットに入れてそこに向かう。

ちょうど商人街と貴族街の境目の位置に小高い丘がある。

メインストリートを外れ、小道に入る。そこまで深くない森を抜け、山道をゆるゆると上ると、急に目の前が開け、山頂に上る険しい獣道が現れる。

長い道のりではないけれど、いかんせん厳しい。

そんなわけで人気はなく、その丘の上はハルのお気に入りになった。

春は一面にピンク色のレンゲソウが咲いていた。

夏は街を見下ろし、揺れる木々の木陰で暑さをしのぐ。

秋はきのこを収穫し、ダロンさんに食べれる物をより分けてもらった。一度、中毒になったけれど。

冬は、真っ白な街に明りが次々に灯る様子を暖かそうだと眺めた。

人恋しい時は、いつも丘の上にいた。

確かに『いつも』だが、この状況は初めてだ。

「ええと」

はつきり言つて、迷っていた。  
もちろん、道じゃなくて。

「放せ！お前ら、一体、何者だ！」

伸びた夏草の中、くぐもった声が聞こえる。それを囲むようにむさ苦しい男たちが「静かにしろ」「暴れるな」「死にたいのか」、王道の文句を叫びながら麻袋の中にそれを押しこんでいる。

ああ、きつとあれは拉致だ、犯罪だと、不謹慎にも悠長に思う。

「困ったな」

何を迷っているのかというと。

すでにこの状況が”普通”じゃないということ。それは仕方なく早々に諦めた。

ならば、どうしたらこの状況がいかに早く”普通”に戻るかだ。

まず、第一に『助けるかどうか』。

人道から外れていると思うかもしれないが、わたしは…何が何でも

か弱き一般庶民だ。ここで策もなく出て行こうものなら間違いなく殺られる、ことになる。

仮に、助けるを選択するとして、第二に『人を呼ぶかどうか』。もちろん、呼ぶ。ひとりでこの状況の打開は不味いだろう。そうなるとう普通するように町まで戻って間に合うか。

「間に合わないだろうなあ」

仮に、助けられないことにして、第三に、無視するとか？……心がなんだか激しく痛むけれど。

その間にも、押し込めもがいている男たちを見据えて、叫び抗い続ける多分『少年』から目を離さず。

「よし」

「なにが『よし』だい？お嬢ちゃん？」

その声に背筋が凍った。

「あいつらも馬鹿だな。こんな餓鬼に見られやがって。しかも気付いちやいねーし……あんな坊ちゃんひとりに手こずりやがって。大の馬鹿三人が」

その呆れた声に、ハルは息さえも潜めた。

「俺に余計な仕事ばかり増やしやがって」

さすがに相手も確認できる至近距離で目撃者Aになっていたから、周囲の気配は探っていたはずだった。なのに、明らかに背後に確認できるその気配は、ああ、ぬかったと単純に思うには危険すぎる匂いがした。

「残念だったな」

「なにが」とは聞き返さなかった。

瞬間、肩越しから背中にかけて鈍い痛みが走り、同時に視界は暗転した。

薄暗い闇に包まれる視界の中で、前方で拉致されつつある少年と目があった。

燃えるような赤銅色の髪。

そして利口な彼は気付いたのだろう、声も出さず気配さえも出していなかったはずのわたしの存在に。明らかに青褪めた顔色と、どこまでも。

そう。

どこまでも印象に残る”翡翠色”の瞳。

わたしの選択は間違っていた。  
はなから選択肢がひとつ足りなかったのだ。

『やられる前にひっそりこっそり、やっておけ』

うん。

もし今度こんな事態に出くわしたらそうしよう。  
それだけ判断し、意識を手放した。

# 11 ハルと花待ちのひと(4)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でご連絡ください。読んでくださってありがとうございます。



## 12・ハルと花待ちのひと(5)

魔術師、魔術師！

どこに逃げても、その姿かたちを闇夜に隠そうとも、見つけるぞ。

ウィザード  
魔術師！

低い、深い、闇夜からうねるような掠れた声が響いた。  
それは呪いではなく、どこか歓喜に満ちて。

歌うように溢れ続ける、幾人もの重声だと気付いた。

ウィザード  
魔術師！

お前はどこにいる。

ウィザード  
魔術師！

「どこにもいないってばっ！うっ、さい、なあ、もうっ」

連日に突入したその声に、怒り心頭で勢いよく上半身を起こした。  
瞬間、前頭部に鋭い痛みが走り、鈍い音が無機質な部屋に響く。遅  
れて、背中に鈍痛が走った。

「いた……」

涙目に、前頭部を触ろうとして両手に自由がない。状況を思い起こそうとする前に、隣で地面に頭を埋め、身悶えする見知らぬ人間を視界に入れる。どうやら前頭部の原因はその辺りにありそうだが、はたと赤銅色の肩まで伸びた真っ直ぐな髪が目についた。

ああ、そうだ。

小道で選択を失敗したんだった。

「へ、平和が……普通が……」

さらに、項垂れつつ確認した視界が嫌にクリアに見えていて、いつもの瓶底めがねがないことに気付く。

「……あれも色々高かったのに」

肩を落とし、ため息をつき、覗きこまれていたそれと目があった。

至宝。

すべての感情を打ち消す、ただ単純にそれは美しい色だと思った。

「翡翠」

「どこか痛みはないか」

ハルの呟きの代わりに、そっと発せられたその声が、自分に向け

られた労りだと気付くのに数秒用した。生まれてこの方、そんなふうに体を心配されたことなどない。あったとしても、労力としてまだ使えるかどうかの判断材料でしかなかった。

「……すまない」

それにもまた目を丸めた。

俯いた彼は同じ年頃だった。その顔は遠目でも思っていたが、麗美だ。赤銅色の髪に翡翠の瞳。一般的な町人服から覗く健康的な肌。まるで、その服が本来の彼の服ではないかのように馴染みない。ちなみにおでこが赤いのは、わたしの石頭が勢いよく直撃したからだろう。

「巻き込んでしまった。まさか、あんなところにこの祭り中、ひとが来るとは思わなかったんだ。悠長に……わたしが」

イメージからは想像できないほど、彼は落ち込んでいた。見た目だけで判断すれば、威張り散らせとは言わないが、彼は堂々としてるのが似合う。

「あの、あなたのせいではないと思いますが」

不意に上げた彼の顔は今にも泣きそうだった。それさえも美しいと感じる自分に苦笑いし、子犬のような少年に好ましさと同時に多少の苛立ちを感じた。

どうやら彼は相当優しい人間のようなうだ。自分だって被害者だといふのに、他人しか見えていない。

”あるまじき”。

思い当る節を嘆息で消し去り、言葉続ける。  
そんなわけではない。

「そもそも人攫いは罪です。と、ウィザード歴史大全に書いてありましたよ」

「いや、あの。え、全部読んだのか、あの分厚い本！」

「はい。ああ、最終巻がまだですけど」

「良く読んだな……って、いや。あの、……私が悠長にあいつらに」  
「わたしの方にもう一人いました。どちらかといえば、そちらの方が手だれだと思います。あなただけでは攫われて、ハイ、サヨウナラ」

「……物言いが随分、直接的に物騒だな」

ウィザード歴史大全のおかげで、かなり彼の態度が軟化してしまった。あまり彼とは近付かない方が良い気がするというのがこのに。

「……だが」

まだ言い募る彼に畳みかける。

「例えば、わたしがあの場にいなかったとして、あなたはやはり連れ去られたはずです。例えば、わたしが先にあの場にいれば、あなたが狙われているとは限らなかったかもしれないですけど」  
「それはない」

即答されて、驚くことなく肯定の意を心の中にしまう。

「例えば、は、尽きませんが……とにかく、ひとりより二人です」  
ふ、と息をつき、言い切った。

「さっさと”お互いの普通”へ戻りましょう」

至宝が一瞬、驚いたようにその目を見開いて、そして今までで一番美しく笑った。

## 12・ハルと花待ちのひと(5)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

### 13・ハルと花待ちのひと(6)

どこかの倉庫だと思う。石を積まれた壁に高い位置の小窓。小窓には鉄格子。扉は木材だが、分厚く頑丈そうで壁との隙間は見られない。誰も周囲にいないのか、声も人の気配もなかった。

両手足を縛られ、小窓から差し込む月の光だけで確認できる範囲はそんなところだ。  
それにしても。

背中に冷や汗が流れた。

体中をずきりと痛みが走りぬけ、額に脂汗が浮かぶ。意識を失うほど強く木刀のような物で叩かれたのだから当たり前だが、打撲が熱を持ち始めているようで、体が重く火照る。

そうして思うところは二つ。

「女、子供には優しくと教わらなかったのか」と「随分、鈍ってる」。前者はあの男に、後者は自分へ。

「どこか痛いんじゃないのか？本当に大丈夫か？」

なぜか、至近距離、真横に座る綺麗な顔に内心高鳴る胸を押さえながら「大丈夫です」微笑み返す。納得いかなそうな表情で口を開きかけ、何か言おうとして口を閉じた。

「きみの名前を知らなかった」

「……いまさらですか？」

「何か言ったか」  
「イイエ？」

いまさら、だ。その話題を思い出さないように、のらりくらりとかわし続けていたというのに。

美形は知り合いにはいないし、そもそも、こんな普通とかけ離れた非常時下で出来る知り合いなんて、絶対、後々、大いに後悔する。

特に、多分、この彼には。

「わたしは『お前』でも『あなた』でも、最悪『貴様』でも結構ですけど」

「貴様って……ありえないだろう。どっかの暴君じゃあるまいし。大体、見ず知らずの人間と生死さえ運命共同体になったっていうのに、随分、冷めてるんだな」

「慌てる気力がないだけです」

背中に激痛が走るの。と、付け加えたいところだ。

「こんな状況で冷静に対応しているのも普通じゃありえない。まだ小さな女の子に」

「……ちいさ」

反論しようとして、覗きこまれた至宝の、その目に宿っていたものに驚いた。

”不信感”。



いつの間に。何に對して。  
名前を教えなかったからか、それだけなのか。

「失敬な」

聞こえたはずだろうに、彼は感情を何一つ動かさなかった。  
まさか、誘拐した一味のひとりだと思ってでもいるのか。「そう  
だ」とでも笑ったらどんな反応をするのか、意地悪なことを考えな  
がら至宝から目を逸らす。  
逸らした先に、すっかり視界に入れてしまった、朧な月あかりに  
ざわめくものを押し込めて。

『ウィザード  
魔術師！』

ああ、また幻聴が。

「うるさいな。ひっこんでなさい」

呟くように、けれど強い口調で言うとそれは止む。ますます訝し  
げな表情の彼に、若干、疲れたように笑い返した。

「ええと、この状況にどうして冷静に對應しているか、でしたっけ  
？」

「いきなり襲われたんだぞ。しかも閉じ込められて」

「同じことをお聞きしたいところですけど？」

「わ、私はっ……」

その続きを聞きたくないので、かぶせる。

「折檻部屋に比べれば」

「せ、せっかん……？」

「折檻の部屋があつたんですよ」

突き抜ける悲鳴。その声は自分のものだったのか、それとも他の誰かのものだったのか、思い出したくもない。暗く冷たく窓さえない、石の密室。そういえば、この場所のように。

「孤児院育ちは珍しいですか」そう付け加えて嗤えば、彼は至宝の目を揺らした。疑うならどこまでも突き詰めなければならぬ。なのに、彼はやはり優しすぎるようだ。

「わたしだって早く帰りたいです。」普通普遍”それ以上のものはありません」

「す、すまない……」普通普遍”？」

「なにか」

「いや、どこかでも聞いたな、と」

子犬のようにしょんぼりしてしまった彼に少しの罪悪感を覚えながら。

「ゴンザレスです」

「もっとまじな嘘をつけ」

仕方ないな。

「ハル」

投げやりに名を告げる。  
はっとして顔を上げた彼の目はやはり至宝で珠玉。

「ハ、ハル？ハル……」

そつとなぞるその声は優しく。

「ああ、ハル。わたしの名は

」

言われる前にかぶせて、言い切った。

「ヒスイ」

「え！？」

「ヒスイってことにしてください。ゴンザレスでも結構ですよ」

これ以上の面倒ごとは勘弁してほしいので。  
譲らないとわかったのか、彼は項垂れて言った。

「わかった。ヒスイでいい。お前、変わり者すぎだ。疑って悪かった  
ハル」



### 13・ハルと花待ちのひと(6)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

## 14・ハルと花待ちのひと(7)

「まずはこのロープをどうにかしないとな」

ふうむ、と眉間に皺を寄せて考えるヒスイはなんだか幼い。赤銅色の髪に翡翠色の瞳。初めて目にしたときはあんなにも大人びて見えたのに、今はどこか愛着さえ湧く可愛らしさだ。

「野良犬に名前を付けたのと同じ状況かな」

「何か理不尽なこと言わなかったか？」

「いいえ」

迷子の犬だ。迷子の子犬。

「よし。ハル、ちょっと両手をこっちに」

言われる通り、縛られた両手をヒスイに向ける。何をするのかとヒスイを見ていれば、石の床に転がり、両手を縛るロープに顔を近づけた。

「は!？」

「わっ、動くな、ハルっ」

ギリとヒスイの歯がロープを啜える。

「け、怪我しますからっ!っというか、違う方法考えましょっつ」

「ひよいかりや」

意味不明の返答とともに、ヒスイの息がふわりと手首にかかる。

ぞくりとする背中に「ひい……」声なき声をあげ、必死に自分を言いくるめる。

迷子の犬だ。迷子の子犬！じゃれてるだけ、じゃれてるだけ、じゃれてるだけ……

すぐに耐えられなくなり、自ら途中で意識を飛ばした。

ただただ、ロープが少しずつ緩んでいくのを感じながら、ここが朧な月あかりだけの薄暗い空間であることに感謝した。

「あ」

交差し縛られた両手が解放されて、ハルはすぐにヒスイを振り返った。ぐったりと横たわったヒスイの顔に赤銅色の髪が汗で張り付き、目を閉じて荒い息を繰り返している。唇に血の痕を見つけてハルはそつと両手を伸ばした。

両腕がざわめく。

「ごめんなさい」

「違う。そこは”ありがとう”。それと私のも解いてもらえると助かる」

なんでもないといいように、唇をひと舐めしてにっと笑う。

「……ありがとうございます」

「どういたしまして」

”ごめんなさい”だ。

本当ならば彼にこんな怪我をさせることはない。

ヒスイの両手足を縛っていたロープをほどくと、久しぶりの自由に嬉しそうに立ち上がる。そうしてみれば、彼は思っていたよりも背が高く華奢だった。

「ハル？大丈夫か、ほら」

まだ座ったままのハルの手を不意に掴む。

「あ」

ギリ。

全身に熱が駆け巡る。両腕には熱く燃えるような痛みと熱が走り抜けて行った。急に歪められたハルの顔を見て、慌ててヒスイは手を離す。

「じゅめ……っ！」

背中を木刀で打たれた痛みではない。

初めてではない、けれどわたしの一生に何度もは”ありえない”。



ただ。

赤銅色の髪と至宝の翡翠色の瞳を見たときから、どこかで気付いていたのだ。それが確定しただけのこと。長袖のブラウスの下、この両腕に青く鈍く光る血脈がわたしに教える。

嘆息し、疲れたように目の前で慌てるヒスイを見上げた。

「わかりましたよ」

誰に言うでもなく呟き、決断した。

こうなったら、何が何でも数秒でも早くここを脱出し、彼をあるべき場所に送り届け、わたしは絶対に”普通”に戻る。金輪際、誰にも触れさせないような”普通”へ。

ウィザード  
魔術師！

歓声と喝采があがった。

ああ、どうして普通でいたいと願えば願うほど”普通”が遠のいていくのだろう。

「ちょっと驚いただけですから」

「でも」

「一応、女子なんです。綺麗な男性には弱いんです」

「……無表情で言わないでよ」

すつと両腕から熱がひいたのを確認して、部屋の中を見回す。隅にぞんざいに投げられたバスケットが目に入り、駆け寄った。

中身は本によってガードされていてびくともしていなかった。

「ハル？」

「よいしょ」

バスケットから包みを取り出し、開く。バケットで作ったサンドウィッチも無事だ。

硬いパン万歳！

「よかった。いただきます」

「え、ちょ」

「……いりますか？」

大きな口を開けて食べようとしたところで、ヒスイが慌てて声をかける。知らない人間が作ったものなんて彼は食べないだろう、そう教育をされているはずだ。そう思っ、一応だけ声を掛けると、翡翠色の瞳を輝かせて隣に座った。

「やった！ありがとうございます。おなかペコペコで！」

「……え」

「え？」

「あの」

「うん？」

「食べる、んですか？」

「いただくけど？」

食べるなら、ともうひとつのバケットを渡す。嬉しそうに速攻で齧り付くヒスイを見て思う。

「……どっちが変わり者ですか」

せめて誰かが食べてから食べようよ、毒入ってたらどうするの。

#### 14・ハルと花待ちのひと(7)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

## 15・ハルと花待ちのひと(8)

孤児院に辿りついたとき、そのおくるみに刺繍されていたその文字は、あるものを指していて。唯一と言っていいほどの善良なシスターが、孤児院を去る際に一度だけ言った。

本当の名を、告げてはなりません

確かに良い助言だった。

ハルは、すでに顔も名前も思い出せない、唯一善良なシスターに本当に感謝していた。

一度、バスケットから古本を全部取り出し、目的の冊子以外をバスケットに入れなおす。物騒なタイトルの3冊が手元に残り、さつさと片っぱしから目を通していく。

「……『術と式』は……うーん……やっぱり、それぞれの構成の考查ですか」

「ちよつと気になることがあるんだが」

「趣味ですから、お気になさらず」

サラリと流したハルに、ヒスイは目をこれでもかと見開いた。

「趣味!？」

「趣味なの!？」

「はい」

「それが!？」

「ですから、はい。趣味以外のなにものでもありません」

「いや……うん。だよ……そうなんだけど」

「それがなにか？」とでも続きそうなくらい強気で言われて、ヒスは口を閉ざす。

”使える” はずはないから、”趣味” でしかありえないとは思いつつも、一般庶民が興味を持つには甚だ怪しすぎで、そもそも、ただの女の子にしか見えないハルの外見からは全く想像できない趣味だ。

「……マニアックすぎる、読むだけなんて。なんでこんな本を読もうと思ったのか、一度、しっかり聞きたいよ」

広げられた本のタイトルを確認して、彼は心底呆れたように呟いた。

反対に、どうやら早々に”趣味” ということを決着がついたらしいと、ハルは胸をなでおろしながらページを捲った。それ以上に追及された場合に用意していた文句を捨て去り、本の内容に集中する。決心したとはいえ、なるべくなら穏便に進めたい。気付かれたくない

いのだ、特に。

気付かれないように、いまだ微妙な表情をして、古本を手持ち無沙汰に捲る赤銅色の髪の彼を一瞥した。

彼には。

ここから脱出すれば、率先して関わりたくないし、そもそもこれ以上、関わり合いたくない。例えば、他の誘拐事件に巻き込まれてもいい。例えば、生死を彷徨うほどの大けがを負ってもいい。けれど、どうしても彼等だけはいけないと、直感が告げる。

それにしては随分、油断しすぎだし、危機感ないし、簡単に信用しすぎだし。

優しすぎる。

それ自体は好ましい。好ましいけれど、彼にとってそれがいいことなのかと言われれば、きっと否。そこまで彼のことを知りながら、わかっていながらもハルには彼の正体を彼に告げる気はない。

彼が”ヒスイ”に甘んじている限り、ハルが”普通”へ戻るための害はないのだから。

「このあたりですね」

手に取った『魔術19』の小冊子からはかび臭い匂いと独特の果実のような甘い香りがした。

「趣味が魔術ってありえないだろう……兄様だつて」

目的のページを開こうとしたところで、ヒスイの気になる文句に手を止める。が、聞かなかったことにした。

「簡単に脱出方法をご説明します」

「まさか、これを”使う”とか言わないよね？」

指し示された『魔術19』のとあるページを見て、にっこり頷いた。

「せいかーい」

脱力し、それでもなんとか這い上がってハルの両肩をがっしりと掴む。

「あ、あのね……ハルはまだ小さいから知らないのかもしれないけれど、魔術は魔術師<sup>ウィザード</sup>じゃないと使えないんだよ？」

「はい」

「『はい』って……もしかして、ハル！」

「違います」

即答すると、おもしろいくらいに再度、項垂れた。

「私だって、まだ兄様以外に見たことないよ……」

褒めて欲しい。

そんな爆弾発言にも関わらず、見事に平静を装い、聞かなかった



ことにして。

ついでに、ともすれば国を揺るがすようなすっかり発言をした彼を叱り飛ばさなかったことに対して。

## 15・ハルと花待ちのひと(8)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

## 16・ハルと花待ちのひと(9)

不意に目を上げると赤銅色が焼きついた。見上げる彼の翡翠色に映るのは朧の銀の月。

囚われの身でありながらも、凜としたその姿勢に素直に見惚れた。簡素な廃屋となった倉庫の中でさえ、彼等は彼等であるのだらう。

「ハル」

しっかりと認識されてしまった自分の名前に、苦笑しながら「はい」答える。

「わたしは」

その先を言われるわけにはいかなかった。そろそろ、故意にこの話題を避けてることくらいは感じているだらう。

「ヒスイ。私があなたを元の場所に帰します。必ず」

「ハル！聞いて……」

「あなたが、元の場所に帰って、それでもわたしへ伝えなければと思ふのなら、その時に聞きましょう」

そう言って、背中を向けてその先を告げることを強制的に拒否した。

『魔術19』のとあるページを開く。

翡翠色がいまだ納得いかないと、射るような視線を向けていることは、わかっていただけれど。

「……魔術は魔術師しか使えないものですが、わたしが研究してきた中で、ひとつだけ誰にでも使えるものがあることに気付きました」

甘い香り。

本から漂うこの香りは『ある力』だ。

それに気付いたのは、良くも悪くも現代にまで名を残す『魔術シリーズ』を執筆した大魔術師の本を古本屋で手にしたときだった。この本と同じように、かび臭さに混じって僅かに完熟した果物のような甘い香りがした。香りの元を辿って行き着いたページ。その結果、その魔術を発動するに至ってしまったわけだが。

「性質が悪かった……あれは、本当に」

知らないで発動させてしまうことを予め知っててやったとは思えない。思い出して、げんなりとため息をつく。もし、現代にあの大魔術師<sup>バカ</sup>がいたら、迷うことなく背後から攻撃し返す。それくらい性質が悪かった。

「ハル？」

「いやちよつと、歪んだ過去を思い出しまして。すみません」

開いたページに手を翳す。

「……たまに、古代の失われた魔術式を使ったものの中に、長い年月でも耐えられる力を封じ込めた魔法陣が存在するんですよ。例えばこれとか……」

ギリ。

長袖のブラウスの下、ハルの両腕に閃光のように青白い光が走り、紋様を描きだす。熱をもったそれはブラウスからは透けて見えず、顔を一瞬顰めたハルの様子にヒスイが気付くことはなかった。

ウィザード  
魔術師！

ウィザード  
魔術師！

重なる歓喜。喝采。

締め付けるような痛みと焼きつくような熱さの中、ハルは頭の中に沸き立つ久しぶりの歓声それに観念したように弱々しい笑みを浮かべる。

「わかってる、こっちがわたしの普通だってこと。だけど、仕方ないでしょう？この世界の”普通”は、これではないんだから」

誰に言うでもなく言い、事態を把握できずに何事かと見つめるだけの彼を見上げる。

「つまり。これがそれ、です」

「誰でも、使える……？」

「はい。ちなみにこれは、風の魔法陣です」

「風の……魔法……陣？」

「これから、これを使ってこのあたりを吹き飛ばしますので」

間があつた。

「ごめん、もう一度言ってもらえるかな」

「吹き飛ばすので、そこから脱出しましょう」

頭を抱えられた。

「そっちの扉を吹き飛ばして、もう少し穩便に脱出した方が良いでしょう……」

「無理ですよ、これ。制御きかないんで」

「……物騒すぎる。違う方法を……」

「すでに発動中です。吹き飛ばすまで、時間の問題です」

「ハル」

「これ以上、何も受け付けませんので。いいですか、これで壁をふっ飛ばしたら、すぐに真っ直ぐ走ってください。建物が崩れるかもしれない。巻き込まれたって責任とれませんので」

「う、わかった。」

洪々、といった感じだが、理解はしてるだろう。

「それでは、いつきまあす」

「え、もう!？」

慌てるヒスイをよそに、一方の手を吹き飛ばす壁に向け掲げ。

もう片方の手でそつと違う”式”を地面に書き記した。

## 16 ハルと花待ちのひと(9)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んで下さってありがとうございます。



## 17・ハルと花待ちのひと（10）

とある花祭りの夜。

伝わる地響きとともに、何かが盛大に爆発する音が夜空にこだました。

けれど一年に一度の祭りに酔いしれる王国の民はそれに気付かず、新しい酒を開け酌み交わし、灯るランプの下で陽気に踊り続けた。その一方で、一部の人間はそれを敏感に察知し、慌ただしく動き出した。

「……って、ハルッ……！」

ヒスイは爆風に飛ばされないように、けれどハルに言われた通り真っ直ぐに走った。

振り返れば爆風で飛んだ小石が正面から突き刺さるから、兎にも角にも振り返らずに走り続けるしかない。爆風が背を押し続けるのもあるが、ハルの所在を確認できないまま一番近くの大木を目指し全力疾走する。

大木の裏に回り込むと、辺りを覆う灰色の粉塵が落ち着くのを今か今かと待った。パラパラと瓦礫が地面に降り注いでいる。

「……ふっ飛ばしすぎだろ……」

焦燥だけが浮かぶ。思った以上の衝撃だ。制御できないにもほど

がある。それよりも、それを放った彼女の姿が見えない。

「ハル！」

靄のかかった状態のまま、倉庫を振り返った。

「……………え」

そこに倉庫などなかった。

「え？」

いや、倉庫だけではない。元からそこには何もなかったかのよう

だった。次第に晴れ上がっていく視界を、満月がその場を明々と照らし出す。

数十メートル先まで一直線になぎ倒された木々。  
その手前に唯一、無残に残った石の土台。

「ハル？」

無数の瓦礫はあるものの、人気はまったくなく、時折、忘れた頃に木々から風で落とされた小石が音を立てるだけの静寂が訪れていた。

確かにさっきまで彼女<sup>ハル</sup>はいて。

確かにさっきまで彼女<sup>ハル</sup>と捕えられていた。

その現実さえ疑わせるほどの現実。

不確かに手が震え、体中からあつという間に血の気が引く。足腰が途端に力をなくし、その場に足を折った。走り寄り、あるはずの探し回る力さえ、例えば、故意的に引き抜かれたように。

「なぜ、なにも……ない」

疑問にもならず、声は掠れ、風に消えた。

それならば彼女の名を呼ぼうとして、彼女の名前を忘れてしまったように口は動かず、まるで、その言葉が何か制約を受けているように。翡翠色の瞳は今は混濁し、何も映さない。

「ああ！」

両手で顔を覆う。この事態に涙さえ出なかった。

よく考えてみれば。

彼女は全く逃げる素振りを見せていなかった。

そんなことさえ気付かないなんて。

情けない。

不甲斐ない。

ああ、そんな言葉ではすまされない！

それよりも何よりも。

「巻き込むだけ巻き込んで、私だけが生き延びようとは！」

いつからか干乾びてしまったように、乾いた喉はその悲鳴に、叫びに、強烈な痛みを与える。

痛い。  
痛い。  
痛い。

痛い！

彼女は、どこへ行った。

何故。

何故。

何故！

何故、私だけが生きる！

「  
名しか知らない彼女の全てを私が奪った！」

数時間前に会ったばかりの、少し変わったまだ小さい女の子の全てを。

「  
ハル……」

世界が暗く重く堕ちていった。

いつまでそうしていたのか。  
数分だったのか、数時間だったのか。

チリン。

背後に聞こえた小さな音に、咄嗟に振り返った。

けれど、そこに彼女<sup>ハル</sup>はいなくて、代わりにこの王国ではあまり見かけなくなったモノがいた。遥か昔の大戦後から、彼らのような小動物は絶滅の一途を辿っていたからだ。今では裕福な家庭の愛玩動物ではない。

「……ねこ？」

猫。

その様相は、今まで見たこともないほど変わっていた。突然変異でもありえないだろう、燃えるような赤い長毛。じっと見つめるその目は、混沌を思わせる、吸い込まれるような一色の黒。

「おまえ」

不意にとことこと歩き近付くと、心配そうに見上げた。

「きみにまで心配させるなんて、わたしは……失格だ」

何が、とは口には出さなかった。

チリン。

よろよると立ち上がる。

”ヒスイ”が立ち上がったことに満足したのか、赤い猫は暗い森の方へと歩き出す。何故か、その猫がついて来いと言っているように、後を追った。

時折、猫は心配そうに振り返り、そして”ヒスイ”もまた跡形もなくなつた倉庫を振り返った。

静かに風が吹き、木々が揺れた。

「ごめんなさい」

どこからともなく澄んだ声が聞こえた。

「……さようなら。イルルージュ王子」

チリン。

鈴の音が最後に聞こえ、不意に強く吹いた風に消されていった。



## 17・ハルと花待ちのひと(10)(後書き)

次に閑話を一話はさめます。ここまで読んでくださってありがとうございます。  
ございます。誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせいただければ幸いです。引き続きよろしく願います。

## 閑話 2

強いていうなら “特殊”

強いていうなら “強靱”

強いていうなら “忠誠”

強いていうなら “賢才”

さらに強いていうなら “冷酷で冷徹”、けれど “冷美”

それがこの王国誰もが知っている彼への賞賛。

当の本人は、そんなものまるで役に立たないと、目の前で素直に、嬉しそうにわざわざ報告をしに来た弟から顔をそむけた。

弟の明るい笑顔は、この殺伐とした冷たい空間の中で皆に憩いと安らぎを与えた。

眩しすぎて目が眩むほど。そむけたくなるほどに。

赤銅色の髪に翡翠の瞳。

どこからでも目を引くそれは、優しく明るい弟にとっても似合っていた。遠目からそれを確認しただけでも彼の一言一憂の表情を思い出して、すっかり口元を緩めてしまう。

「兄様！」

弟が笑顔でそう呼んでくれれば、この身を取り巻く環境に耐える

には十分すぎる理由で。  
それだけでよかった。

私は彼のために生きているのだと。

それだけでよかったのだ。

「どうして民を犠牲にしなければならないのです!」

教師と勉学で衝突することがあれば、大きな翡翠色の目に涙を溜め不貞腐れたように頬を膨らませた。

「兄様。私は、民を犠牲にしてまで他国へ攻撃をするよりも、この国を豊かにする方が先だと思っのです」

賢く、けれどそれ以上に優しい弟。

それが彼にとって諸刃の剣になるのなら、特殊で強靱なこの力を忠誠の名の元に賢才と言わしめるそれを躊躇なく冷酷なまでに振りかざそう。

だから、どうか。

いつまでもこの国で、健やかにそのままに。

なのに。

「イル」

頑なに閉ざされていた扉をそつと開ける。

廊下の窓からは、双子のまだ幼い妹たちの笑い声が聞こえてきた。なのに、この部屋は日中だというのに暗幕まで下ろされているせいか、空気は重く暗い。中にいるはずの弟からも返事がなく、足早にベットに近付いた。

「イル、ルージュ」

そこに横たわるのは、随分と痩せこけた赤銅色の髪の少年だった。1週間前、花祭りを嬉しそうに待ち望んでいた彼とは別人のようだ。

「何があつた、イル」

ベットの端に腰かけ、痩せこけ今や骨ばってしまった乾いた頬をそつと撫でる。息苦しそうに眠る弟は以前の見る影もない。

花祭りに誘拐された。

総動員して行方を追っていた。

この力も惜しみなく使うはずだった。

あいつらが、もっと早く私に次第を知らせ、助けを求めに来てい

れば。

いや、もっと早く自分自身で状況を察知していれば。

爆音と地響きに気付いてからでは、何にしる遅かったのだ。

ギリ。

齒を食いしばる。

「もし、私が側妃の子どもでなければ……お前をこんな目に合わせることはなかったのに」

誘拐され、夜中、自分の足で戻ってきた弟の目からは生気が消えていた。犯人については詳細に話すものの、どこにいたのか、何があったのか、それを尋ねると途端に口を噤み翡翠色の目からはとめどなく涙が流れるという。

「何が……」

髪にそつと触れたところで、息遣いは荒くなり汗が噴き出す。悪夢でも見ているのかと、起こそうかと口を開きかけたときだった。

「ハルッ……………早く……………きみも……………逃げ  
て……………」

弟は苦しげに「ハル」と何度も叫ぶ。  
宙に浮いた手を握り締めた。

「……ハル？」

呟き、そこに何か甘い香りが漂うのを感じた。  
まるで完熟した果物のような。

「この香りは、まさか……」

思い当たる節があったが、同時にその考えを嘲笑とともに切り捨てた。

「ありえない。魔術師なんて」

強く否定し、立ち上がると、長い絹糸のような青味がかった白銀の髪がサラサラと揺れた。柔らかな深い青色の目を痩せこけてしまった弟に向け、細く長い指で額を文字を書くようになぞりながら、静かにそつと呟く。

「おやすみ。良い夢を。イルルージュ」

荒い息は途端に消え、安らかな息遣いが聞こえてきた。それに誰にもわからないような小さな笑みを作る。

「……ハル。あの日、イルといたもう一人の人質」

呟き、暗く重い部屋を後にした。

どこまでも深く深い青色の目に冷たさを湛えて。

## 閑話2（後書き）

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んで下さってありがとうございます。



## 18・ハルと珠玉のひとつ（1）

燃えるような赤色の長い緩やかに波打つ髪が、風に煽られ舞った。混沌の黒はどこか彼方を見つめ、見据え、けれどそこに何も映していない。

歓喜と喝采は、残響のように彼女の脳裏に響いていた。彼女が座る周りの地面に書き殴られた多数の青白い光の文字式は、いまだ効力を携えているかのように鈍く光っている。

不意に何かに気が付き、彼女の小さな口が「ごめんなさい」掠れた声で、呟く。何度も何度も同じ言葉が繰り返された。

「さようなら。イルルージュ王子」

チリン。

どこからともなく鈴の音が聞こえ、そして風に消されていった。

「ハルちゃんっ。スープとライ麦パンね」  
「はい。ありがとうございます」

石段のナスタチウムが橙色、黄色と風に揺れている。常連のお婆さんにライ麦パンとスープをそれぞれ渡し、次のお客さんに注文を聞く。

「ハル！。今日のスープ、なんだっけ？」

狭い店内の奥で、別のお客さんを接待していたリジーの声が聞こえる。

「ひよこ豆のカレースープです。あんまり辛くはないですよ」

「そうそう。ハルが花祭りで南の行商の奥さんから習ったとおき。はい、ひとつね。まいど！」

花祭り。

あれから1週間だ。

自力で脱出後、ちよつと所用を済ませていたらあつという間に最終日になっていた。カミユさんに『ひよこ』の使い方を教わる約束をしていたので、家に戻り、結局2晩、寝ることもできないまま妙なハイテンションで過ごした。若干、引かれたけど。

それもこれも、あの誘拐犯達のせいだが、それはきっちり後始末（おしまひ）をしてあるから清々しいほどこで。

気がかりなことと言えば。

「……あの親玉」

「ハルちゃん。このスープもうひとつくれるかね」

「はい。ありがとうございます」

親玉。親玉というか、背中を強打した主犯格だろうあの男だ。  
いまだ背中に痛みは残り、まざまざと変色した紫色の痕がある。  
実はちよつと屈むだけでも体中に激痛が走るが、事情を知らないリ  
ジーに余計な心配をさせるわけにもいかず、そもそも余裕があるわ  
けでもないから休まず出勤中だ。

「……どこに行つたんだか」

後始末ごしごの際に、あの男だけいなかった。むしろ他の阿呆達より率  
先して後始末ごしごしたいくらいなのに。

「次、会つたらただじゃ……」

「ハルちゃん。ライ麦はちよつと硬いから、ええと」

「それでは米粉パンはいかがですか？食べやすいですし、どんなス  
ープにも合いますよ」

営業スマイル全開。

「じゃあ、それもらおうかしら」

「ありがとうございます」

「ハルちゃん、メガネやめたのねえ」

あ。

そういえば、その後始末ごしごもまだだった！

「うつかり落として壊してしまいました」

「そっちの方が可愛らしいわ」

「ふふ、ありがとうございます。米粉パン3つです。ありがとうございまして」

目の前のお客さんを送り出して、扉を閉めると店内は随分ゆるやかになっていた。時計を見ると一番忙しい時間は過ぎていて、リジ―もひとりでお客さんをさばき始めている。ふらりと眩暈が襲い、近くの台に手を着く。

これは、まずい。

直感でそう思った。

「あ、ハル。ライ麦パン追加で焼こうかな」

「じゃあ取りに行つてきますね」

「奥の部屋の内側のね」

「はい」

リジ―の太陽のような笑顔に、笑顔で頷いてうつすら汗ばむ背中を庇うように奥の部屋へ向かった。

花祭り。

あれから1週間。

気がかりなことは、ただひとつ。

「……イル、ルージュ王子」

自分がこの”普通”に戻るために、切り捨てた優しい少年。あの少年の心は大丈夫だろうか。

「あつた、これだよね」

ライ麦パンの種が整列した木枠の箱を手取る。

「あ」

全身から血の気が一気に引いた。

倒れる、そう判断するより先に意識が落ちていった。

イルルージュ王子は大丈夫だろうか。

彼の優しい心は、わたしが見せた幻影で壊れてしまっていないだろうか。

けれど。

どうしても、わたしはこの”普通”という生活を守りたかったのだ。

彼等に関わるわけにはいかないと。

けれど。

それは、正解だった……？

「……ハルッ！！！」

遠くで、リジーの声と、何故か赤銅色に翡翠色の瞳の少年がわたしの名を呼んでいた。

## 18・ハルと珠玉のひと(1)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。

読んでくださってありがとうございます。お気に入りになっていただきたびに小躍りです。最後まで頑張ります！

## 19・ハルと珠玉のひと(2)

燃えるような赤い髪はまだ小さな女の子が、黒い目にいつぱいの涙を溜めて膝を抱えていた。

隣に古いクマのぬいぐるみがちよこんと置かれている。あちこちから綿が出て、ボタンの目は片方が飛び出ている。腕や足に至っては、ほとんど引きちぎられていて、かろうじて糸でつながっているのが不思議なくらいだった。

一見、どこかにはあるような光景で、けれどよく見れば異質だった。

みすばらしいワンピースに身を包んだ女の子の両腕は、大けがをしたのか何重にも包帯が巻かれている。

何よりも。

女の子の周りには余白がないほど記号が書き詰められている。

あれは。

幼き、わたしだ。

なぜか、わたしは浮遊し、上空から光景を見ているようだった。感覚はなく、目を背けることもできない。

覚えている。これは大切に使っていたクマのぬいぐるみを、孤児院の手伝いをしている庭番に『むしゃくしゃした』それだけで壊されたのだ。それを直そうとした。



魔術<sup>しぎ</sup>で。

そう思った瞬間、どこかで歓声が上がリ、わたしは幼きわたしから目を外し、振り返った。

赤銅色の髪。

翡翠色の瞳。

向けられたその眼は何も映していない。対面しているはずのわたしでさえ。

イルルージュ王子。

背筋が凍るとはこういうことかと思った。

わたしはとんでもないことをしてしまった、瞬時にそう悟った。

わたしが”普通”を欲したから。

わたしが”普通”に戻るように彼の心を犠牲にしてまで、細工をしたから。

わたしが。

わたしが魔術師<sup>ウィザード</sup>であることを認めなくなつた、たつたそれだけのこのために。

それでも、あがいてもあがいても、あがいても！

わたしは、まだ”普通”の人生を送りたいと切望し、必死に手を伸ばしていたい。

たった一つの、そんな希望でさえ魔術師<sup>ウィザード</sup>には、叶わないのか。

万物の力などいらなかったのに！

「ヒスイ！」

叫び、身を起こす。  
身を起こす……。

「ゆ……め？」

薄暗い中、ゆっくりと周りを見渡す。荒い呼吸を繰り返すたびに背中に激痛が走り、頬を伝った汗が掛けられた布団に流れ落ちた。体中が重く鈍い。

「ああ！」

突如上がった低い悲鳴に似た声に、ビクリと肩を震わせ、体を硬直させた。

「高熱で倒れたんですよ！何をなさってるんですか！」

何かをサイドテーブルに置くと、慌ててソレはわたしをベットに横にする。手際が良い上、どこまでも丁寧で背中に痛みが走ることなく横にされた。

「まったく！ちょっと目を離すとこれです」

どうやらおかんむりらしい。

……この見知らぬ男は。

「あの」

「さ、少し目を瞑ってください」

「いえ、あの」

「まったく！拒否は受け付けません。ささっ」

いや、そうじゃなくて。

……ダレ？

とりあえず、額に乘せられた布が冷たくて気持ちよくて目をすつと閉じた。

「もう少し休んでください」

静かで落ち着く声。

目を閉じる前に見た謎の不審者の様相を思い浮かべた。

栗色の髪。整った顔はどちらかといえば美形だ。濃紺色の瞳は深く神秘的で、ウィザード歴史大全の中の写真でしか見たことのない昔あったという湖の色に似ていた。

「あの」

戸惑いがやっとわかったのか、ため息ひとつを返し謎の不審者はベット脇に座ったようだった。ギシリとベットが軋む。

「その傷で無理しすぎです」

さっきまでのドタバタが嘘のように静かに告げて、そつと頬に触れ、髪に触れていく。普段なら恥ずかしすぎて振り払う動作を、熱で重い体のせいか、それともひんやりとした冷たい手が気持よかったからか、黙ったまま受け入れた。

「あの」

「リジーさんは知らない。隠して仕事していたんでしょう？」

「はい」

「……リジーさんから伝言です。三日間、強制休暇とのことでした」

そうなることは見越していたから、リジーに気付かれないように仕事を続けていたのに。

ああ、これで三日分の給与がなくなった。

この異常事態にも、どちらかといえば生活のかかったその報告の方が悲しくて、この謎の不審者を放置したまま再度眠りの中に落ちていった。



## 19・ハルと珠玉のひと(2) (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。

誤字・脱字等発見しましたら感想等でお知らせください。読んでくださってありがとうございます。

## 20・ハルと珠玉のひと(3)

よく考えてみれば、昨日のうちに状況を追及して追い出しておけばよかった。もとい、お帰りいただいておけばよかった。いくら犯罪の少ない王都だって、おかしいでしょ。見知らぬ人間が至れり尽くせりで介抱してくれるって。お人よしにもほどがある。

そんなことを悶々と考えていると、目の前に湯気が立ち上る。

「はい、どうぞ。熱いですからちゃんと冷ましてから食べてくださいね」

栗色の肩までの髪に深い湖色の目。町に出たらさぞや女性に人気あるに違いない、鼻筋が通ってクールな顔立ち。

けれど、目の前の男は不審者だ。

「勝手に台所をお借りしました」

律儀にそう言って、ベット脇の丸椅子に腰かけた。

「毒など入っていませんから」

冗談だろうか？整った顔をにこりともすることなく。ハルは、反射的に受け取った湯気の立つオートミールを見つめながら、この状況に至ったわけを反芻した。

「……あの」

すっと伸ばされた手にビクリと肩を震わせ、目を閉じて歯を食いしばった。

その手は、優しく額に触れるだけで、恐る恐る目を開くと、不審者は自分の額にも同じように手を当て「まだありますね」一言、呟く。

『殴られる』そう思ったのに。わたしへいつも伸びる手は、支えられるためにはない。伸ばされた手によって必ず痛みを伴った。

「どうかしましたか」

表情筋はないのか。突っ込みたいところだが、若干、心配そうな声色を含んでいたので、首を小さく横に振り、手元の端が欠けたスーパークップに視線を戻した。

ミルクの甘い香りが鼻孔をくすぐる。

「……心配、か」

「なにか」

「いえ。あの、いただきます」

「ええ、まだありますから、たくさん食べてください」

この家にミルクはなかったはずだ。麦も。まだ寝ているうちに買いに行つて、作ってくれたのだろう。一口すくい、不審者の忠告通りオートミールをしっかりと冷ませてから口に含んだ。

「……………おいしい」

小さく、本当に小さく呟いただけだったのに、次に顔を上げたと



き、不審者の男は微笑んでいるように見えた。なんとなく嬉しくて次々にスプーンで運ぶ。そういえば他人が作ってくれたご飯は久しぶりだ。悠長に感慨深く黙々と食べていると、不審者は「ああ、そうでした」呟き、顔を向ける。

「食べたなら薬を塗りましょう」

「……ぐ、もぐ、おいしい                    って、は!？」

「それは塗らないと治らないですよ」

「はあ、そうですけど、この家には薬なんてものはないです」

あつたら、いくらなんでもこんなになるまで放って置くことはない。薬は高価だ。そもそも別料金で医者に行かなければいけないし。リジーに伝わりそうで、医者には行けなかったのだが。

「ああ、それなら」

不審者は軽く返事し、もぞもぞと瓶を取り出す。瞬間、蓋がきつちりしまっているはずなのに苦く、鼻につく臭いが漂った。咄嗟に鼻をつまむ。

「……しよれはにやにでしゅか」

不審者は清々しいまでの無表情で「薬草をすりつぶした特製です」答える。

不審者は……薬師だったのか。

「ちなみに、私は薬師ではないので自己流ですが」

謎は深まるばかりだ。

苦くて鼻につく匂いの薬をやんわりと断つたのに、それならば煎じて飲むようにと言いだした。瀕死の事態はなるべく回避したい。仕方なく塗り薬を許可し、自分で塗ると言ったのに、何故か不審者はそれを譲らない。仕方なく嘆息して癖のある長い黒髪をひとつにまとめ、背中を向ける。

まあ、孤児院にいたくらいだし慣れてるけど。

「それじゃ、お願いします」

ワンピースをスルスルと脱ぐ。不審者、一応『男』の前で。

「あー！」

不審者が叫ぶので途中で手を止め、振り返る。

「あっあっ！」

振り返ると逆に不審者が背を向けた。

「……あ、あの、すみませんでした」

観念したような小さな声が聞こえた。

「だから自分で塗ると言っただけですよ」

「……はい」

背中に塗るってことは必然的に裸同然になると思いもしなかったのか、それとも、自分では言いたくないけど貧弱で女だとも思ってたのだったのだろうか。

「そんな綺麗なものじゃないから、大丈夫ですよ」

耳が赤い気がするが、今までどちらかといえば無表情で無頓着な感じがした不審者がここまで感情を出しているのがおかしくて、自嘲的な嗤いを含めながら笑う。

「そんな！あなたは女性なのに……！って、すみませんっ」

慌てて振り返り、慌てて背を向ける。

「あの……きれい、ですから」

モゴモゴと小さな、本当に小さなお世辞が聞こえて、なんとなくまた笑ってしまった。

## 20・ハルと珠玉のひと(3)(後書き)

お気に入り登録&読んでくださってありがとうございます。誤字・脱字・感想等ありましたら感想等へよろしく願います。

## 21・ハルと珠玉のひと(4)

「平穩無事……これに勝る言葉はないわ……熱っ」

のどかだ。

小窓から差し込んだ、強くなり始めた夏の日差しを眩しそうに見つめ返した。

ハルは無駄にスースーする背中を気にしながら、ゆでたじやがいを剥いていた。台所の小窓から入るそよぐより少ない風にも背中スースーする。冷却効果抜群の薬草が、あの不審者の塗り薬に大量に投与されていたのだらう。そのお陰で、随分、背中が下がり楽にはなった。若干、臭気が気になるが。

けれど。それにしても、とハルは思う。

「……で、あの不審者……っていうか、ダレ？」

栗色の髪。深い湖色の目。美形の不審者は、リジーのお店にたまに買い物にきたところ、奥から悲鳴が聞こえて駆け付け、そのままの流れでハルをわざわざ送ってきたのだと言う。その上、一日中介抱し、一緒にオートミールを食べた後、用事があるのでと颯爽と去って行った。

そうになると、不審者は乗り掛かった船よろしくの善意のみで甲斐甲斐しく介抱してくれたのだらう。自分が作ったという塗り薬を律儀に予備まで置いて。

「善意、ね」

向けられたことないその感情に、苦笑した。

「珍しいこともあるなあ」

呟いて、不意にヒスイ、イルルージュ王子の歪んだ顔が浮かんだ。夢で見た彼は憔悴しきり、澄んでいた瞳に輝きがなかった。真実のところはわからない。けれど、あの優しすぎる王子様は当たらずも遠からずなのではないかと、心のどこかで思う。

こうなるとわかっていたはずなのに。

後悔しないと決めて、やったことなのに。

「……どうしたらいいんだろう」

今朝から幾度となく考えてきたこと。けれど、それを実行するにはハルにとってあまりに重いことで。それをしたことによって、果たして済む問題なのかハルには予測がつかない。後悔を背負うのは自分に課せられた罪だ。けれど。

「ヒスイは」

彼にこそ何も罪はない。

もやもやと沈み込んだ憂鬱な心を払拭するように、昼食のスープ

を作り始めた。

が、結局、始める前と同じところに辿りつき、ため息をつき、小さく首を横に振って打ち消す。しばらくしてやっぱり、彼の顔を思い出し、考え込んで、ため息をつく。

そんなことを繰り返している間に、いつのまにかボウルに山盛りになっていたじゃがいもを見て苦笑いした。

「まったく。後悔しないと、決めていたのに」

じゃがいもを潰して少量の雑穀粉を混ぜ、適度にまとまったところで棒状に伸ばす。

「お湯、お湯」

いつもリジーのお店に持っていく寸胴鍋にたっぷりのお湯を沸かしながら、隣で小さめの鍋に完熟したトマトを潰す。バジルと酸味のさわやかな香りにハルは口元を緩めた。小さな家中にその香りが広がって、ハルは背中の中の痛みも不審者のことも忘れ、ヒスイのことは取りあえず再度、奥底に隠してスープを作る。

「うん。美味しそう!」

じゃがいものニョッキ、トマトスープ。いそいそと湯気の立つスーパークップを持って、振り返って。

固まった。

「……………安静にしてると、言いましたよね?」

低い、ひんやりとした声。  
っていうか、何故。

「え、えと」

それは壁に凭れたまま、有無を言わさない視線を向けていて。

「言い、ました、よね？」

だから、何故。

「ハル、さん」

名前を呼ばれて浮かんだ冷や汗に、背中が凍りつくほど冷たく感じた。いや、冷や汗のせいだと思いたい。

額にあからさまな「怒」マークを付けてそこに立つのは、帰ったはずの”不審者”。どんな状態でも綺麗な人は綺麗なんだと悠長にも思いながら、取り急ぎ。

「…………ごめんなさい」

謝った。

どうやら、不審者は元々戻ってくる予定だったらしい。



ベツトに血痕ごとく赤い染みを作るのは断固拒否したため、テーブルで食べることが許可された。もはや誰の家だか、誰が家主なんだかわからない。

とりあえず、不審者の前にもスープリップカップを置く。

「いただきます」

口に含むとニョッキが柔らかく、けれど弾力をもって潰れる。甘味に雑穀のプチプチが美味しい。次いで大きめに潰したトマトのスープリップ。自画自賛だが。

「美味しい！」

と、はた、と気がついた。

なんていうか、訝しげ、もしくは不審そうな微妙な表情をしている”不審者”に。クールビューティーは返上だ。表情が表に現れにくいだけで、気がついてみれば意外に豊かだ。細微だからわかりにくいだけ。

確かに言うことを聞かないで長時間台所に立ったことは認めるし、それに対して怒っているなら百歩譲って許せる。けれど作<sup>スープリップ</sup>ったものに対して、その表情は許せない。

「”不審者”さん」

「はっ」

「毒とか入ってませんから。それでも一応、リジーのお店に出して

る料理人ですし、そんな変な物入ってませんよ」

「あ、いえ」

「あ、もしかしてお昼食べて来ました？もう三時くらいですもんね。って、どうかしました、”不審者”さん」

「って、え、”不審者”……って、は？」

”不審者”連呼。小さな反撃を繰り出す。

顔を上げて訝しげな表情のまま見据えられて、ハルは鼓動が速くなるのを感じた。

薄暗い部屋の中でも落ち着いた湖色の瞳が、まるで。

その目に捕えられそうになって、慌てて次の言葉を繋げる。

「”謎のひと”でも”謎のお節介”でも、”謎の美男子”でも、なんでもいいですが」  
「なんで謎ばかり」

機嫌が悪くなるかと思っていたら、反対に口元を緩めた。  
反則です。

だって、まるで。

珠玉のようなひと、じゃないか。

## 21・ハルと珠玉のひと(4)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んで下さってありがとうございます。

## 22・ハルと珠玉のひと(5)

「私の名前はゴンザレスです」  
「……………はい？」

止める前にサラリと告げられた名前に、頭を抱えた。決してその名前が悪いわけでもなんでもなく、強いて言えば、この珠玉のような不審者には似合わないだけで。

「……………偽名ですか」  
「はい」  
「……………偽名、ですよね」  
「はい」  
「……………ゴンザレスさん」  
「はい」

もはや新手の嫌がらせにさえ感じる。名乗らなければいいのに、結局、不審者は名乗っても不審者のままだ。目の前にすつと伸ばされた手を、まじまじと訝しげに見つめていると苦笑いしながら「ハルさん」今度は柔らかい声で呼ばれる。  
その声に言葉に体中がざわめいた。

「はじめまして。これからよろしくお願いします。ハルさん」

『ハルさん』。

今に至るまでに何度か呼ばれていたはずなのに、改めて彼が言う

それは、まるで違う効力をもっていた。ザワリと何かが揺れて同時に体が熱を帯びる。

「ハルさん？」

「ハル！ハルでいいですっ！さん、なんていりませんからっ、はいっ」

絶対、耳まで真っ赤だ。ヒスイの時はなんとか誤魔化したけれど、真昼間、いくら薄暗い室内とはいえこの至近距離で彼にわからないはずがない。と、目の前の不審者と目が合う。

「げ」

「ふ」

ニヤリ。

そんな笑いだっただ。

間違いなく苛めて楽しむ、的な。そこに決して嘲笑など悪い意味はこめられていないけれど。

「ハル、さん」

見つめられて艶やかな、そう妖艶な。うっとりするほど甘い声で囁かれた。

「つく！」

「ハルさん。毒が入ってるとか、そういうのではなくて。すみません、食べたことのないものだったのでどうやって食べるのかわからなくて。いただきます。ハルさん」

確かに、確かに悪い意味は込められてないけれど！

「ハルさんも一緒に食べましょう」

「うつつ……」

そう言う和不審者<sup>ゴンザレス</sup>は、スプーンで一口。口元に付いたトマトソース少量を、どこからか、いつの間にか出したハンカチでそっと拭う。どこまでも粗相のない優雅な所作。その所作と『食べたことがない』発言に、彼は貴族だろうと判断する。貴族なら、じゃがいもより雑穀より『小麦』のパスタだ。

コクリ、そんな音がして不審者<sup>ゴンザレス</sup>の切れ長の目がそっと開く。

「あ、あの……？」

一瞬、固まったかと思いきやさらに一口、二口。

「あ、ハルさん。口元に」

当たり前のように手が伸ばされて、スッと指が口元に触れる。近付く顔に思わず椅子ごと後ずさりした。

「あ」

「あー！」

間の抜けた声と慌てる声が狭い狭い家に響いた。

もう無理だ。

っていうか、折角なので養生させて欲しい。

背中から椅子ごと床に叩きつけられて、ぐったりと目を閉じたまま、微動だにする気にもならなかった。変人不審者が目の前にいようと、背中が今まで以上に痛もうとももうどうでもよかった。

兎にも角にも。

誰かこの不審者を連れて帰ってください。

ああ、この世界の”普通”にこの魔術ちからが含まれていたら常々こんな事態にはならなかったのに。

だけど。

本当にそうだろうか。

「すみません。ふざけすぎました」

そうなのだろうか。

魔術ちからが含まれていれば、”普通”であったのか。

きつと、違う。

”普通”。

無理矢理に求めているなければ、イルルヒスイージュもまた。

無理矢理に求めた時点でそれは”普通”ではなくなっていた。  
ああ、そうか。

そして。

わたしは自分に課せた罰をすでに破っていたのか。

不意に行き着いた答えに自然に笑みがこぼれた。ならばやることはひとつ。

「すみません……つい、久しぶりに楽しくて」

可哀想なくらい気落ちした声が聞こえて、床に仰向けに倒れたまま目をそつと開く。近くに覗き込む湖色の瞳に一瞬、怯んだが、なぜかその瞳が揺れているのに気が付いて、小さく息を吸い込みゆつくりと静かに吐く。

彼に対して、この状況に対して舞い上がっていた、そう自身を判断できるようになるまでそんなにかからなかった。知らずに高揚し続けていた気分がすつと落ち着き、目の前の美形不審者ゴンザレスに対する胸の高鳴りも体中を支配する熱も急激に収まっていった。

体を起こし、口を閉ざして見つめ返す彼を見据える。

”困ってる”のだろうか。不意にそんなことを思い、苦笑いした。こっちのセリフなんだけれど。

「……ゴンザレスさん」

「ゴンザレスで良いです」

「ゴンザレ……偽名なんですよね。じゃあなんでも構いませんね。」



ええと……」

なぜか、その瞳に湖面をたゆたう銀色の月を思い出した。

「おぼろ  
朧」

その名が気に入ったのだろう。

彼は、静かに笑みを浮かべた。

## 22・ハルと珠玉のひと(5)(後書き)

更新が遅くなり反省です。誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。お気に入り登録、また感想もありがとつございます。読んでくださってありがとうございます！

## 23・ハルと珠玉のひと(6)

次に目を開けると真っ暗だった。いつベットに入っただのかさえ定かでない。

「おぼろ  
朧？」

静寂の暗闇に自分の小さな細い声だけが響く。

「……帰ったのかぁ」

そもそも、リジーのお店からここまで全くの善意で運んでくれただけで、気にして世話を焼きに来てくれる方がどうかしている。けれど途端にひと気のなくなった小さな家がハルをひどく落ち込ませた。

ランプを取り、気だるげに朧おぼろとトマトスープを食べたテーブルに近付く。ぎしりと床板が軋んでハルを余計に憂鬱にさせた。

「……手紙？」

本を重しに用紙の切れ端が挟まっていた。

「おぼろ  
朧」

なんとなく嬉しくなって、ランプを置いて椅子に腰かける。下の方を無理やりちぎり取ったあとがあるが、その綺麗な用紙には、彼にお似合いの繊細な文字が書き連ねてあった。

「『ごちそうさまでした。久しぶりに温かい食事をとりました。美味しかったです。朧』」

最後まで偽名だが、定型句のようなその文句にも彼らしさが感じられる。

「あれで美味しいって表情なんだ。仏頂面でどっちかと言ったら美味しくなかったのかと思ったのに」

クスクス笑いながらも一度読み直した後、四つ折りに丁寧にたたむ。

「うん」

本棚の一番取りやすい位置に置いた本の表紙裏にしっかりと挿む。本を閉じ、丁寧に装丁がなされた臙脂色の表紙を見つめた。しばらくそうして、一度、目を瞑る。何かを思い返すように時折、苦しい表情を浮かべ、歯を食い縛る。

『見つけたぞ、魔術師！』

闇の奥底から聞こえる、歓喜に満ちた名もなき者の低い声。輪唱のように次々に同じように違う声が、叫ぶように求める。次第に本を持つ両腕が軋むように痛みを伴い、熱を持ち始める。

ワンピースの袖に発光した青い光の線が滲み浮かんた。

「わたしはずっとここにいた」

『聞こえるか歓喜の声が喝采が！』

「聞こえていたよ」

『ウィザード  
魔術師！』

「認める。わたしは『ウィザード  
魔術師』」

生まれたときから今までずっと。何よりも”普通”を求めるのは、  
自分自身が”普通ではない”とわかっているから。

「わかっていたよ。聞こえていた。今まで自分に罰を課し、それを  
遂行することで、”普通”を許してきた。だけど、それが難しいな  
ら、わたしは”普通”を求めるべきではない。求めてはいけない」

『ウィザード  
魔術師！』

鳴りやまない喝采が上がった。

臙脂色の装丁の本を元の位置に丁寧に戻し、本棚の最下段、料理  
の本の後ろ、二列目にひっそりと並ぶ19冊の『ウィザード  
魔術』シリーズ。  
今は亡き大魔術師の称号を持つ古代の魔術師、ハルに言わせれば  
大魔術師が執筆したその本を一冊手に取る。

「あの大魔術師……今度こそ、知らない人が間違つて触つてたら死者が出たでしょ」

呆れた口調でハルは言い放ち、長い波打つ黒髪を揺らしながら勝手口から小さな小さな裏庭に出る。

あの日。

風の魔法陣を発動させたものの、相変わらず本には威力まで意図的に書かれておらず、同時に相殺する式を書いた。はつきり言つて運が良かった。使つたのがわたしで。

ひとつにまとめた赤く長い髪が揺れた。

軋む両腕をブラリと力無く下げて、古代魔術師に諦めに似た思いを馳せ、同時に盛大なため息をついた。

倉庫と思しき建物はほぼ全壊。視界は嫌に嫌味なほどにクリアだ。風の魔法陣、大暴走。

相変わらず本には威力まで書かれておらず、同時に相殺する式を書いた。ついでに、この事態を”普通”に戻すためにいくつかの式も追加で書いたが、まさか。

「10連発なんてね……恐ろしい、大魔術師の呪い……」

原因など知らないし知りたくもないが、ここまで徹底的に後世を潰そうとする意図がわからない。

坪庭に湿気のない乾いた夜風が吹く。

ハルは片手に本を持ち、空いた片手で慣れた文字を宙に書き連ねていく。その文字は徐々に青味が掛かった光を帯び、はつきりとした文字式として浮かびあがった。

不意に最近ハマった、薔薇の宮殿に住む悲しきサダメを持った美しい王子と孤独な優しき少女のラブロマンスを思い出した。

「そうそううまくは行かないものです」

苦笑いして。

次の瞬間、燃えるように赤い波打つ髪が残像だけを残して、その場に誰もいなくなった。

## 23・ハルと珠玉のひと(6)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んでくださって、またお気に入り登録ありがとうございます。



## 24・ハルと珠玉のひと(7)

その日、深夜。

寝静まったウィザード王都で白亜の城に向かって、燃えるような赤い翼よくを持った戦闘機シップが飛んで行ったという情報が商人達の間で密かに流れ、それからしばらくの間、また戦争が始まるのではないかと噂が流れ続けた。結局、噂はあくまで噂で終わり。

昔、太古の昔、いたという『鳥』を知る者はこの王国に誰もいなかった。

白亜の城。ウィザード城。

美しく積み上げられた城壁を越えて、強固な警備の騎士団のさらに先。大広間を抜けて、豪奢な絨毯が敷かれた幅広の階段をぐるりぐるりと上がっていき、彫刻と絵画が並ぶその廊下のまださらに奥。寝静まった奥深く、そのひとつの暗幕の下ろされた部屋で、燃えるような赤い髪の少女が蒼白な表情で何かを見つめ、立ちつくしていた。

痩せこけた頬、青白い肌、薄く紫色に変色した唇の彼を茫然と見つめていた。見るなり全身に衝撃が走った。

何が彼に起きたのか。

原因は。いや、言わずと知れている。

「ハルツ！」

突然の叫びに、びっくりと肩を震わせた。

「ああっ、どうして！どうして私はっ！」

虚空に手を伸ばし、何かを掴もうとする仕草。部屋に響き渡る悲痛な泣き叫ぶ声にも、部屋の扉の外にいるであろう近衛騎士が入ってこないのは、この状況が今に始まったことではないことを表している。きつとあの日からずっと。

「きみも、逃げて！早く！そうだ、彼女はあの時……名しか知らない彼女の全てを私が奪った！」

「……イル……」

呟く彼の名前もままならず、つい数週間ほど前の彼の姿とのあまりの豹変ぶりに声をなくした。

想像以上だ。

実際、どこかで甘く見ていた。たった数時間を共にしただけの名前しか知らない孤児の少女ひとりに、こだわることなどないだろうと。なのに、彼の風貌はあまりにも”明るく優しい王子”からはかけ離れてしまった。

ああ。彼はたったひとりの自身の国の孤児<sup>たみ</sup>までも愛する優しい王子だった。

そんなことにいまさら気付いても取り返しのつかない。

「……ヒスイ」

顔を背けたら、弱気になったわたしは、もう二度と彼を見ることができないだろうと感じた。だから、両手で顔を覆うこともできず、震える冷たい指先をそつと彼へと伸ばす。そして今度は、死んだように眠り始めた瞼にそつと指を乗せた。

「ごめん、なさい」

”普通”を求めた代償の大きさに、血の気が引き、その場に碎けそうになるのを必死にこらえながら何度も何度も繰り返す。

覆う銀膜がいつの間にか溢れた涙だったとは気付かずに。

「ごめんなさい」

いつしかイルル<sup>ヒスイ</sup>ージュの顔も見えなくなっていて、パタリパタリと涙が零れ落ちた。燃えるような赤く長い髪が、白い羽根布団に波打ち、広がる。

「ごめんなさい、イルルージュ王子」

重い暗幕が風にゆっくりと揺らめく。

隙間から覗く銀色の月がそつと二人を照らした。

「……………ハ……………ル？」

枯れた声。痛みを伴うそれにはっとしてその方向に目を向ける。

翡翠色の両目が静かに見つめていた。

「……………ハ…………ル？」

ゆっくりときこちない動作で彼の手が伸びる。そして、そつと波打つ赤い、燃えるような髪に触れた。それが現実だと彼に浸透していくのが手に取るようになった。少しずつ見開かれていく瞳は、以前に知っていたいた翡翠色で。淀み、世界を映そうとしなかった目に光が戻り、同時に。

「……………ハ…………ル？」

名を呼ぶその声にも生氣が宿り。

「……………ハ…………ル」

視線を合わせたまま静寂な空間で、細くなつた指がそつと目元を拭う。

「…………ハル……へん、じ、し…………て?」

さっきまでの悲痛な叫びが嘘のように彼は落ち着き、すでに何かを悟ったように、むしろ悟らせるように名を呼ぶ。

「ハ、ル」

赤い髪の少女は声に出すことができず、ただただゆっくりと頷いた。

「ハル」と、イルルージュは嬉しそうに、花が咲いたように顔をほころばせる。

それを目にして、ハルはその場にととう泣き崩れた。

「ごめんなさい、ヒスイ!」

イルルージュはそんなハルの髪をそつと撫ぜ、何かの呪縛から解かれたかのように一筋の涙を零した。

## 24・ハルと珠玉のひと(7)(後書き)

誤字・脱字等ありましたらお手数ですが感想等でお知らせください。  
お気に入り登録ありがとうございます！精進します。読んでくださ  
ってありがとうございます。

## 25・ハルと珠玉のひと(8)

「生きててよかった」

ヒスイは本当にほっとしたように呟いて、上半身を起こし、クッションに体重を預けたまま、力のこもらない手でゆっくりと何度も何度もその感触を確かめるようにハルの髪を梳く。さすがにハルも恥ずかしくなつて顔を上げた。

「ごめんなさ……」

「ありがとう。でしょ？お互いに心配してくれて、お互いにあるがとう。それで終わりにしよう」

その優しさに再度、涙がこみ上げる。

「ありがとうございます」

「はい」

弱々しいながらも満面の笑み。筋肉が落ち始め、血色も悪く格好はひどく王子様らしくはないけれど、やっぱり彼は生粋の王族なのだと感じた。

「ハル、そういえばどうやってここまで来たの？兄様？」

傍に置いてあった水を何度か飲んでもまだ枯れたままの小声でヒスイは問う。

「え？」

「誰にもハルのことは言っていないし、そうなると兄様くらいだと思っただけど」

「いえ、あの……兄様？」

「うん。ちよつと過保護だから、ハルを強制的にここに連れて来たのかと思つた」

ああ、まずい。言わずもがな、わが国の王城に不法侵入中だ。

今日は様子だけ見る予定だったから、何も考えずに窓からお邪魔したのだ。深夜だし、さすがにヒスイも起きているわけではないだろうと高をくくつたのがいけなかった。良い子は寝てようよ！

「あ、あの」

「……つてことは、そうか。知ってたんだ？わたしがこの人間だつて」

王城この。

知っていた。

彼の赤銅色の髪と翡翠色の瞳を見た瞬間に、民に一番人気のある優しい王子だとわかつた。駄目押しもあつたから確信したけれど。

肯定も否定もせずいると、ヒスイはそれを苛めるわけではなく、ただただ苦笑して「やつぱり変装はもつと完ぺきにやらないとなあ……あの誘拐はともかく」呟いた。いや、それ以上に聞き捨てならない言葉があつた。

「……あの。”変装”ですか？町人の服を着ていた、もしかしてあれのことを……」



「うん。花祭りのどさくさに紛れて王城抜け出すために」

「一応確認しますが、ご自分の警護を巻いたんですか」

「あー……それを言われるとつらいところ」

一気に頂垂れた。そもそも、それならば自業自得じゃないか。

「ははは、ごめん、ハル。だけど”誘拐”は予想外だったんだ。元々、わたしは花祭りの間中、王城に職務で軟禁状態の予定だったから。わたしの考えが甘かったと言わざるを得ないけれど」

「笑い事じゃないでしょう」

「今後はしないから、大丈夫」

一体、今後は何をしないんだ。町人の服をやめるのか、それとも護衛も付けずに町に行くことを言っているのか。説得力にいまいちかけるけれど、部屋の外の騎士様方にお任せするしかない。身分違いの私たちは、今後、もうこうやって会うことはないのだろうから。

「……ねえ、ハル」

「ヒスイ」

翡翠色の瞳が揺れた。その先に言おうとしていることに気がついて、咄嗟に被せるように偽物の名を呼んだけれど、その翡翠色の瞳が映すものが揺れているのだと気付いた。

他人を傷つける”普通”など、求めないと決めたはずなのに、わたしはまだ逃げようとしている。

「弱くなった」

自嘲気味に嗤うと、ヒスイが訝しげな表情を返した。

もう騙すわけにはいかない。

嘘をつくわけにはいかない。

隠すわけにはいかない。

彼が真実を告げようとしているならば、わたしもまた真実を告げなければならぬのだから。

ウィザード。<sup>しんじつ</sup>

揺らぐ。

『あなたが、元の場所に帰って、それでもわたしへ伝えなければと思ふのなら、その時に聞きましょう』

「知って欲しいんだ。ハル」

わたしが忌み嫌わ<sup>ふつうではない</sup>れる魔術師<sup>にんげん</sup>だとしても？

このワンピースの袖の下、青白く浮かび上がった血脈。赤い血が流れる普通の人間と変わらない体だというのに、その力を使つたび全身を駆け抜ける痛み<sup>に</sup>それを認めざるを得ない。

ウィザード  
魔術師！！！

その歓声に喝采に血が騒ぐ。

恐れているのは太古の昔よりそうされたように、この存在が狩られること。牢獄でつながら実験台のように死ぬまでを過ごすのは嫌だ。

”普通”を知った魔術師<sup>ウィザード</sup>ほど弱いものはない。

「ハル」

ヒスイは決してそんなことをしない。

もし、彼の周りにいる誰かが、そんなことをしようとするならば、必死に止めて庇ってくれるに違いない。もう、翡翠色の瞳は揺れていないのだから。

けれど。

優しいこの彼<sup>ひと</sup>が、これ以上傷つくを見たくはない。王族でありながら、孤児のことを心配して自分を傷つけてしまったこの彼<sup>ひと</sup>を。

傷つけるものが誰であろうと赦しはしない。

たとえば、自分を戒めるために傷つけるならば、わたしが助ければいい。

たとえば、それが自分自身<sup>わたし</sup>であるならば、この身を自ら焼いたとしても。

そう、たとえ。

ハルは天蓋の向こうの闇を静かに見据えた。

## 25・ハルと珠玉のひと(8)(後書き)

誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。読んで下さってありがとうございます。あ！お気に入り登録も嬉しいです。ありがとうございます。

## 26・ハルと珠玉のひと(9)

『魔術8』を小脇に抱え、ヒスイが止めるのも聞かずに、どうやら体が動かせないほど衰弱しているのをいいことに、ハルは無視して天蓋を開けた。

「気付いてみればおかしいですね。王族直属の騎士達が、こんな間近の不法侵入者に気付かないなんて。ああ、いいです。認めます、不法侵入したってこと」

暗幕が下りているせいか、風でそよいで月が照らしでもしない限り部屋の中は闇のようだった。一点に向かい「ふう」ため息をつく。

「ハル？」

「ヒスイはそこにいてくださいね。ええと、やられる前にひっそりこっそりやっておけ、だったっけ。やるならひっそりこっそり？…この場合、ひっそりじゃないけどいいかなあ」

のんびり言って首を傾げると、闇に消えるのことない燃えるような赤い波打つ髪が視界に入った。

「そういえば、後始末もまだでした。眼鏡と背中おほの打撲と謎の不審者の恨みは晴らさせていただきますよ」

サラサラと宙に文字を書き記す。

「……なんの、ことだ」

突風が吹き込み、暗幕がギシリと揺れて月あかりが差し込む。同時に全身を黒い布で纏った男が現れた。

否、彼はずっとそこにいた。闇の中に溶け込んで。

黒い布をゆるやかに纏っているというのに、その体躯が鍛錬されたものだと思われるくらい体格の良い男だった。

「ハルツ、戻れっ！お前、何者だ！」

「はい。ヒスイは黙ってそこにいてください。黙ってそこにいてくれるのならば、ちゃんと後で約束は守ります」

ギリ。

さっきと同じ軋むような痛みが両手を駆け抜ける。

動けないだろうけど、ヒスイはヒスイだ。無理して這ってでも出て来そうなので、ひっそりと、けれど俊敏に式を書く。ベット周辺ごと”外見からは見えない厚い膜”で覆い、ハルは「さてと」数メートル先の男を見据えた。

「探しましたよ」

「……あのときの嬢ちゃんか」

「ええ。高かったんですよ、あのメガネの材料費」

「……だから、なんのことだ」

「背中なんてまだ痛みます。おかげでお店も休んで給金が減りました」

「……なんの、ことだ。いや、背中は俺がやった傷だろうな」

「それと、謎の不審者まで家に入れる羽目になって。兎にも角にも……」

あの時。

この男に「なにが」とは聞き返さなかった。聞き返せなかったのではなく、聞き返すのが”普通”から遠ざかると思ったからやめたのだ。

その前の選択肢にしても、ヒスイが誘拐されている現場に出て行くのならば、『何が何でもか弱き一般庶民であると振舞うためにも殺されるフリをしなければならず』、仮に助けるのならば『ひとりで倒しちゃうと不味いから、誰かを呼ばなきゃ』と。

仮に、うん、この選択肢は今になって思えばひどい人間だ。

『助けられるのに助けない』なんて。

「つまり、あなたはわたしに恨まれているわけです」

笑顔で言っただけなのに、男は笑いもしなかった。口元まで覆っているから見えないっちゃあ見えないけど。

「……お前」

「それでは、いつきまあす」

「は!？」

「秘儀。大魔術師<sup>バカ</sup>の呪い」

ありがたくも、全く強そうでもない秘儀を普通に、通常喋るペー  
スで告げた。



”忌み嫌ふつではないわれる魔術師”  
にんげん

ふと、わかりたくもない大魔術師バカの気持がわかってしまった気がした。

シュルリシュルリ。

ハルの手元から滑るような風を切る音と、音とは正反対の重く太い茨のツタが男を目がけて突進していった。

「ああ、なるほど……これはツタっていう文字なんだ。何が出てくるのかと思った。それにしても……きつともうこの辺りには自生してない貴重なツタなんだろうなあ。採取して植物園に売ったら高いかな」

ハルはどこからか出したペンで、開いた”魔術8”に文字を追加していく。

「うわあああああああああ！……！！！！！！！！」

身体を太いツタに絡まれ持ち上げられた男の悲鳴に全く聞く耳持たず、ハルは「今後使えそうなんだけど……」首を傾げながらあーでもないこーでもないと文字を書き続ける。

「うおおおおおおおおお！……！！！！！！！！」

中身が出そうなほど締めあげられた、もはや元屈強な男が、早々

に涙目で抗議をしているが気にもかけず、ハルは「さすが大魔術師<sup>バカ</sup>」  
諦めたように呟いて、自分が足した文字をなぞった。

文字がふわふわと宙に浮き上がり、ハルの赤い波打つ髪の毛の周りを  
嬉しそうに一周した。

そんなどこからどうみても奇異な光景に、ひとり呟く。

「……………ハル？」

ハルがその声に反応したように振り返った。

その視線とがぶつかり、彼は咄嗟に手を伸ばした。けれどそれは  
ハルによってもたらされた『厚い膜』によって遮られ、届かない。

「ハル！！いい！！きみがつらいなら……………」

赤い髪が揺らめき、イルルージュ<sup>ヒスイ</sup>の視界を染めた。

「わたしは”魔術師<sup>ウィザード</sup>”なんです」

ハルは今にも泣きそうな、そんな笑みを湛えていて。

そして、その場にハルは膝を折った。

## 26・ハルと珠玉のひと(9)(後書き)

いつも読んでくださってありがとうございます。誤字・脱字等ありましたらご指摘よろしくお願いします。お気に入り登録もありがとうございます。

## 27・ハルと珠玉のひと(10)

「魔術師です。国へは届けていません。申し訳ありません」

そう言つて、許される前に顔を上げたハルはイルルージュの茫然とした表情を見て苦笑いした。

「大丈夫ですよ、とつて食おつて言うんじゃないですから。あの  
あほ大魔術師ならともかく」

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」  
「うるさいな」

それに応えるようにハルの周りをまわっていた文字式の一部が青白く光ると、男を縛りあげていた茨のツタがさらに太くなり男を圧迫した。

「ぐえ」

何かが潰れた音がした。

「あ、しまった」

ハルの赤い髪を一周していた文字の一部がさらに青白く光り、すぐに霧散した。ぎゅうぎゅうと男を絞め続けていたツタが止まり、多少の余裕ができる。ハルはいまだ茫然としたままのイルルージュから視線を逸らし、男の方へと軽い足取りで近寄った。

「気絶のところ申し訳ありませんが、起きてください」

パコリ。軽い音がして殴られた男が目を開ける。その視界にハルの笑顔を見つけて、茨のツタに捕獲されたまま後ろへ飛び退いた。

「器用な……」

「お前、何者だっ!!!!!!!!!!」

「こっちのセリフでしょ。おばか」

「なっ……」

「で、どちらの刺客ですか？」

「言うわけないだろ！」

「つまり。やっぱり刺客なんですネ」

ハルが人差し指をフワリと動かす。

いい笑顔が浮かんでいた。

「ぐえ」

「あなた方には、わたしの”普通”を奪つた罪を償つてもらわなきゃいけないんですよ。ええ、些細なことです。すぐに終わります。ただ単にあなたの雇い主をお伺いして、木端微塵……微塵も残さないようにちやちやつと、ひっそりこっそり殺るだけですから。ね？」

「些細じゃねえだらうっつ！……！……！ぐえっ、がああああああっ！？」

もとい、男を振り上げて天井近くで振り回すツタ。踊る。

「何か音楽でもかけましょうか？楽しそうな……何か良いのあったかな」

「ひいひいひいひいひいひいひい……！　やめろー――」

真剣に『魔術8』を捲る。

「あんまり知らないんですよ、わたし。芸術には疎くて。そうだ、そのツタを考案した古代大魔術師の本なら何か良いのあるかも。あ、それとも、お花でも咲かせましょうか」

甘い香り。

そのページにも魔力がこもっているのだろう。ハルはそこに記された式をさっと一読し、「やっぱり読めないし、変な式組み立ててあるし」早々に解読を諦めた。

ある程度は書かれていることが読めるようになった。収集して研究を続けた結果、やっぱりある程度の傾向と結果は予測できるようになった。が、ハルは意識はないだろう男を楽しそうに振り回し続けるツタを見上げ思う。

「ツタが”楽しそう”に見えるっていうのも、この式に組み込まれてるんだろうな」

『感情まで左右する精神に語りかける何か』を式に組み込むほどの凄腕の魔術師。しかもそれを長い年月この本に力を押し込んで、成立させ続けている。確かにそれは稀代の大魔術師と呼ぶにふさわしく。けれどそこまでできる大魔術師が、なぜ、どの式にも制御を付けなかったのか。

「それは世界を、自分を排除しようとした世界を呪っていたから」

今の時代よりも彼のひとを取り巻く環境はひどかったのだと、歴史大全は告げていた。

「わたしは大魔術師<sup>あなた</sup>を非難できない。わたしが辿る運命だって、どうなるかわからないんだから」

ハルは宙に新たに文字式を書き記す。フワリと浮いて青白く光り、霧散した。

男がツタから解放され床に落ちたのを確認して、甘い香りの漂うページに触れた。

闇の中にどこからか現れた色とりどりの薔薇の花びらが舞う。白とピンク色と黄色と、そして燃えるような赤。

「ハル」

質素な寝巻のワンピースに映える、燃えるような長い波打つ赤い髪。ハルは自分を呼ぶ凜としたその声に振り返らずに、どこからか舞い落ち続ける薔薇の花びらを見上げていた。どうやら、これはただ舞うだけらしい。不意に視界に入った、根元が闇に消えている不気味なツタでさえ、この薔薇の花びらのシャワーを見上げてうつとりしているのだと気付いて、苦笑いした。

「私はウィザード第二王子イルルージュだ」

振り返り、逆光になって窺うことのできないその王子の顔を見つ

めた。

翡翠色の瞳はきつと元通りになっている。それだけで、生きる術であつた”普通”を手放した意味もあつた。ハルは頷いて満足そうに笑顔を向けた。



## 27・ハルと珠玉のひと(10)(後書き)

読んでくださってありがとうございます。誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。引き続きよろしく願います。

## 28・ハルと珠玉のひと(11)

そういうわけでひと段落。

後始末も済んだし、後は王子イルルージュに任せておけばいい。あの男をどうとでもして主犯を割り出すことなど朝飯前だろうから。

「あの男を木端微塵……じゃなくて、引き渡しまでいることができずに、大変、心苦しいのですが、明日の仕事が控えているため、そろそろお暇させていただきます。数々の無礼を申し訳ございませんでした。それでは、さようなら。イルルージュ王子。永遠に」

語尾を強調し、笑顔で一気に言い切つて、イルルージュと目を会わせないように足早に窓に近寄り、足を掛ける。

名前を名乗ったのはやっぱり失敗だった。『これ以上一生関わるな』と暗に告げたのを気付いてくれるか、心配だ。

「ちょ……ハ……」

でも、これ以上は、まずい。

いくら知り合いだとはいえ、相手は王子殿下様さま。しかも、不法侵入中だ。極刑まっしぐら、磔刑バンザイ。

「ハル！」

慌てるイルルージュを無視。さすがにそろそろ異変に気付かれてもおかしくない。

が。

「言いましたよね？」

来たときと同じように帰ろうとして、式を書き記しかけたところで、掛けられた声に固まった。言葉、ではなくて、その声に。刺客と思しき男の低い声ではない。冷たさを感じる声色は、けれどどこか艶やかで。

「言い、ました、よね？」

だけど、ありえない。

「……なんで……？」

戸惑いを含むそれはイルルージュのもの。イルルージュが『何者だ！』発言をしないところをみると間違いなく王城関係者だ。

「安静にしてると言ったはずですけど。何度も。……ハル、さん？」

全身を何かが駆け抜けていった。  
一体。

何。なん

わたしの名を知るひとが、イルルージュ以上に王城こうにいるわけがないのに。  
強いて言えば。

謎の不審者。

「お、朧おぼろ……？」

ギギギ、油させとでも言われそうなきこちない動作で、顔だけ背後へと向けた。

「あ、れ？」

けれど思った人物はそこにはいなかった。どちらかといえば、それ以上の美形。

「兄、さま？」

「兄！？」

よりによって第一王子！？  
アルバータ

王位継承権をもつ彼に掴まるうものなら命さえ危険な気がする。あまり彼に良い噂はない。女ったらしだとか、気にいらぬものはすぐに排除するとか……なんで名前を知ってるんだらうとか、色々気になることはあるが、兎にも角にも逃げるしかない！

急いで文字を宙に書き記し、攫う。

文字が青白く光ると同時に両手と背中が予想以上に軋み、痛んだが気にしてはられない。勢いをつけて両足を窓枠にかけると思いっきり空へ向かってジャンプした。

「はい」

冷静で、感情のこめられていないような端的な言葉が続いた。

「そこまです」

飛んだ、はずだった。

来たときのように、この国ではもう知るものがない”鳥”となつて。

「まったく。無茶にもほどがあります、王城に乗り込むなんて」

いつの間にこんなに至近距離にあったのか。

見下ろす柔らかな深い青色の目はどこかで見たことがあった。けれど目の前の、長い絹糸のような青味がかつた白銀の髪を持つ彼のことには知らない。不思議な感覚のなか、何より先に鼻孔に届いたその香りにはつとめる。

「魔術師」

完熟した果物のような、甘い、甘美な香り。決して魔術師たちがすべてその香りを纏うわけではないのだと、稀代の大魔術師は記していた。けれど、そのなかでもとにかく大きな力を持つ者はわかつと。魔術師のなかでも恐れ戦く存在があると。

けれどそれ以上に。

「ありえない。魔術師なんて」

同時にその考えを嘲笑とともに切り捨てた。迫害とともにあつたこの国の歴史の中心的な場所おうちょうにその存在が、こんなに悠々といえるわけがない。しかも、第一王位継承権保持者なんて。

途端に、目の前の美しい顔が楽しそうに変わる。

「私もそう、思いましたよ。つい最近」

そう言った彼の目は深く深い青色の目に冷たさを湛えていて。

「イルルージュの口からあなたの名前を聞いた時、感じたその香りに『まさか』と。同じように思いました」

「兄様……あ、の」

「黙っていてなさい、イル」

不意に感じた腕の強さに、やっと”イルルージュ王子のお兄様”にお姫様抱っこされていることに気が付き、慌てて「おろしてください」消えそうな声で進言する。

「嫌、ですね」

即答。

いや、意味がわからない。

「そんな表情をしても駄目です。ハルさん」

彼は微細な変化とともに困ったような表情で首をすくめる。どんな顔をしてたっけわたし。

「あのっ、ええと……どちらさまか知りませんが、名前は呼び捨てで結構です」

ちらりとイルルージュを伺いつつ、何故かじっとみている”イル

ルージュ王子のお兄様”に、にこやかに呼び捨てを進める。朧おぼろと同じで、美形に名前を呼ばれるたびに、この体はザワリと熱を感じるようになってしまったらしい、恨めしい。

「そうですか」

ニヤリ。

そんな笑いだった。間違いなく苛めて楽しむ、的な。そこに決して嘲笑など悪い意味はこめられていないけれど。  
やっぱり、つい最近全く同じことを感じたとき、目の前の美形を止めようとして先手を打たれた。

「ハル」

赤い波打つ髪をそつと撫ぜられる。

余計、体中がざわめいて。

あえなくハルは撃沈した。



## 28・ハルと珠玉のひと(11)(後書き)

いつも読んでくださってありがとうございます。誤字・脱字等ありましたら感想等でお知らせください。次に一つ閑話をはさんで次のハルと〇〇〇に入ります。よろしく願います。

### 閑話 3（前書き）

息抜きに。 稀代の〇〇〇のお話です。

### 閑話 3

” ロサ・リリアンベイリス・ウィザード ”

ウィザードはこの国の名を指し、ロサは、花の中の王を指す。  
つまり、この国の王族の中でも一握りの人間でしか得ることのない名を彼、リリアンベイリスは持っていた。  
ただし、それは名前だけのこと。

リリアンベイリスの扱いはこの国の一般的な民にも及ばず、ましてや王族などもつてのほか。強いて例えるならば、そう。

罪人のように。

「やあ、リリー。ご機嫌はいかがかな？」

「……麗しいように見えるか、エル。ここから出せ」

「それは僕じゃ、まだ無理」

「ふん、知ってる。それとおれの名前はリリアンベイリスだ、残念ながらな。そんな女々しい名前で呼ぶな」

青年<sup>エル</sup>は楽しそうに一笑いして、再度、呼ぶ。

「僕の美しい、リリー」

そうして鉄格子越しに手を伸ばし、リリアンベイリスの顔を覆っ

た長い銀色の髪に触れた。整えることを知らない長い髪は、手入れをされていないからかお互いに絡まり、髪を梳くエルの指をいちいち止める。

「おい、触るな」

けれど枷をはめられた両手は、自分の髪を梳くエルの手を払うことはできず。ただ鎖が石の床にこすれて不気味な音を立てるだけだった。

「リリー。髪を結ってあげるよ」

「ここから出たら、こんな髪など丸刈りだ。放っておけばいい」  
「丸刈り！？やめてよ。こんな綺麗な髪なのに」

エルは時折恥ずかしいこともサラリと言っている。その容姿が端麗だから余計にタチが悪い。

「王子、そろそろ……」

ふたりのやり取りを見て見ぬふりしていた若い衛兵がさすがに戸惑い、上擦った声を掛ける。

「困ってるだろう。早く帰れ」

「リリー。ほら、早くもうちょっとこっちに来て」

「まったく」、エルに逆らうことは無駄だと知っている。諦めた表情でリリアンベイリスは鉄格子に近付く。

エルは無造作に伸びた銀系に櫛を通し、最後に自分の真紅のベル

ベットのリボンタイを取り、結んだ。囚人のときぼろ布を被ったリリアンベイリスに付けられた髪留めだけが、現実のもののようにそこに存在していた。

「おつ、王子殿下！やはりこちらにいらっしやいましたか……はあはあ……へ、陛下が呼びです！」

「呼んでるぞ王子殿下<sup>エル</sup>」

「ふん。そんな肩書、糞くらえだね」

普段の彼とは正反対の汚い言葉を吐き捨てながら、エルは冷たい床から立ち上がる。薄暗い穴倉のような場所でもわかる、太陽のような黄金の髪と艶やかな絹の法衣が揺れた。それを毎回、眩しそうに見上げるリリアンベイリスをエルは知らない。

「おい、エル、」

「嫌、だね」

何も言わないうちからエルは拒否し、呼びに来た近衛兵が焦っているのにも関わらず悠長に立ち止まり、地面に座るみすばらしい、けれど大切な友人にゆっくりと振り返った。

「ロサ・リリアンベイリス・ウィザード」

エルは必ず忘れそうになった頃に現れ、リリアンベイリスに焼き付けるようにそれを告げて帰っていく。

「この国の真実の後継者<sup>ウィザード</sup>よ」

彼の姿こそがあるべき王の姿だとリリアンベイリスは思う。気高く強く、誰もが慕うカリスマ性を持ち。

自分が後継者と呼ばれるなど勘違いも甚だしい。そもそもその権利など生まれたと同時に剥奪されている。疲弊し衰弱したこの国を統べるのは、彼であるべきで、彼でなくてはならないのだ。

「従兄上」

「……お前に従兄と呼ばれるいわれはない」

「でも今の王の息子があなたで、王弟の息子が僕ですから、従兄弟でしょう?」

いちいちそう嬉しそうに言わなくても十二分にわかっている。そもそも本当の兄弟じゃないかっていうくらい髪の色以外似ているんだから。

「それでは、また。従兄上」

また。

幾度となく「来るな」と言っているのに、エルは懲りずにひょうひょうとやってくる。多分、自分の従者たちを巻いてやってくるんだからタチが悪い。

従者たちを慌ただしく（焦っているのは従者たちだけだが）引き連れ、エルは涼しい笑顔とともに外の世界へと帰って行った。

「まったく、従兄弟には敵わないな」

そのお陰で、堕ちるところまで落ちることもない。

”ロサ・リリアンベイリス・ウィザード”と、あの凜とした声に名前を呼ばれるだけで、なんとか十数年も保っているのだ。

騒々しいエルがいなくなり、リリアンベイリスは構わず床に寝転んだ。じゃらじゃらと重しを付けられた枷の鎖が床に当たり、誰もいなくなった暗い牢に不気味な音を響かせる。

「だが、それももうすぐ終わりだ」

呟き、リリアンベイリスは高窓から覗く月を見つめた。

実父はまもなく讓位することが決まった。

もうすぐ、エルは王になる。

「ふ」息を吐いたのか、それとも嗤ったのか。

リリアンベイリスは目を閉じ、唯一動く口で”言葉”を口ずさむ。この国の言語ではない、歌のような滑らかな旋律が暗い牢の中に広がった。

エルはどうするだろうか？

もし。

ここから忽然と姿を消したら。

今度こそ、悪だくみとばかりに口角を上げ、後にハルによって稀代の大魔術師と呼ばれるリリアンベイリスは笑みを浮かべた。





### 閑話3（後書き）

読んでくださって本当にありがとうございます。誤字・脱字等ありましたら感想や活動報告にお知らせください。お気に入り登録、感想、評価、どれもありがとうございます。

## 29・ハルと魔術師（1）

「いやあああつつつ！！！」

静寂の早朝。とある外見だけは豪華な屋敷の、ひどく少女趣味の激しい一室から悲鳴が聞こえた。

近くに聳えるように造られた白亜の壁付近を巡回していた衛兵が、瞬間、目を向けるが、その方向にあるのが件の屋敷だとわかると顔色を一変し、足早に去って行った。

そんな少女趣味の一室に。

「ど……」

白を基調とした柔らかい色調の小花模様の壁紙。ベットにはレースがふんだんにあしらわれた天蓋がおりている。窓際の小机、コンパクトなクローゼット、ソファ等々、この部屋の全ての家具は上品でいて丸みのある可愛らしい調度品。多分、それなりに高価だ。

「どこに稀代の大魔術師<sup>バカ</sup>なんかの夢を見る”普通の人間”がいるって……イタッ！！！」

再度、ハルの悲鳴と、鈍い音が可愛らしい部屋に響いた。

勢いよく上体を起こし、同時に前頭部に鈍痛。続いて背中に激痛が走り、顔を歪める。

「うう、いたい……」

四方からの激痛がハルを現実に取り戻す。汗をびっしょりかいたワンピースに顔を埋めて耐え、悪夢の果ての荒い呼吸を整えた。

「……ゆ、ゆめ。よりによって大魔術師の……」

「……ハル。よく……石頭って言われませんか」

「ふ、ふあっ!？」

恨みがましい声に咄嗟に顔を上げるとそこに、顔を顰めてるのに関わらず、どこまでも美形のイルルージュの兄がいた。おでこが赤い。

「ア、アアアアル……」

「間違ってますよ。アルバ<sup>バカ</sup>ータなんて失礼にもほどがあります。おはようございます。そしておやすみなさい、ハル」

「え？」

有無を言わさぬよう一気に告げ、素早くけれど丁寧に優しくハルをベットに横たえる。

ふかふかの羽根布団に軽いハルの体が沈み込む。サラリとしたシートに火照った顔がさらされ、何ともいえず気持ちいい。

「じゃなくて」

うつとりと目を閉じかけたところで慌てて飛び起きる。今度はしっかり避けた。

「こ、ここはどこですかっ」

自分の家ではないことだけは確かだ。

洗濯物が天井から吊ってあるならまだしも、吊ってあるのはお姫様のような天蓋。ベットに置かれたのが、カビ臭い『ウィザード歴史大全』ならともかく、光沢のリボンが付いたもふもふのパステルカラーの花柄クッション。ついでに、ちょっといびつな継ぎ接ぎの巨大なうさぎのぬいぐるみ。

「どっつて、わたしの家です」

完璧に少女趣味の部屋が？

「あの……ほ、本当に？」

「ええ。どこかおかしいでしょうか」

あなたの趣味が、とつても。

だけど、どう見ても至極真面目な面持ちで答えている彼に、こんなに可愛らしい部屋が？とは突っ込めなかった。世の中には色々な人がいるんだろう。うん、きっとそうだ。

「いえ、どこもおかしくないです」

口の端が若干引き攣ってしまったかもしれないが、そのあたりは勘弁して欲しい。

「ならいいですけど……イルの部屋で倒れたまま置いておくわけにはいけないので、取り急ぎここに運んだんです。この屋敷ならわたしの許可なく誰も入りませんし、そもそも近寄りませんからね」

「ふ」と息を吐くように。

「ウィザード魔術師なんてそんなものでしょう？」

そう、自嘲気味に嗤った。

真っ直ぐにハルを見つめる深い湖色の瞳は、何を憎むでもなくただただ悲しそうで。

ウィザード魔術師をひた隠しにして生きてきた。死に物狂いで”普通”を死守し、結局、こんな事態を引き起こしたけれど。けれど、孤児院でひっそりと生きてきたわたしにはわからない。

不意に手を伸ばして届く距離にある、彼の顔にそっと触れた。一瞬、驚いたように小さく目を見開いて。

その瞳もまた至宝だとハルは思った。

「ハル？」

「……なんでも、ないです」

ハルはふわりと笑って手を離す。いまだ赤い色をした波打つ髪が揺れた。

「それじゃあ、わたしはそろそろ帰ります。色々ありがとございました」

「何を言ってるんです」

「いや、あの……」

「嫌、です」

「ここって王宮内ですよ。こんなところに一般人がいるわけには……」

「この屋敷以外は王宮でしょうね。だから大丈夫です」

引かない。

「でもイルルージュのお兄さんなんですよ？」

「イル？そうですが、それが何です」

「王子様が住んでいるところは王宮なのは」

「イルは王子様でしょう」

屁理屈、というか頑固に引かない。きつと引くつもりはないに違いない。

「イルルージュ王子のこと”イル”って呼ばれるんですね」

「ええ。それよりも、何をもってこようと、ハル。きみは帰さないよ」

「……なんですか」

取りあえず彼は第一王子ではない。  
アルバータ

出所が職業上、中々確かな商人達の噂では、変態……もとい極度の女好き。女性以外の人間の名前は呼ばないとか。だから、実弟であつても”イル”なんて愛称で呼ばないということ。

「アルバータ王子……」

ああ、そういえばさっきアルバ<sup>バカ</sup>ータとか、聞き間違いでなければそんなことをサラリと言ったつけ。

となると。

「本当に大丈夫です」

「嫌、ですね。そんな大傷を負いながら無理するひとを見過ごすわけにはいけません」

「……お医者様ですか」

「まったく違います。あなたと同じだと、言いませんでしたか」  
ウィザード

そうでした。昨日も知れず使った力は、間違いなく魔術師で。

「何を考えているんですか」

「え」

「私と押し問答しながら、違うこと考えてるでしょう、ハル？」

「そんなこと……」

法衣がフワリと揺れ、いつの間にか額にそつと指が置かれ何かがなぞられる。

「私と話をしているときに他の人間のこと考えるなんていけませんよ」

甘い声で囁かれ。

たぶん彼の魔術によって強制的に眠りに落とされたのだった。

「ちゃんとリジーさんにはしばらく休むことを伝えますから」

ああ。

また、お給料が減る。

それだけを思い、再度、悪夢に堕ちていった。



## 29・ハルと魔術師(1)(後書き)

取り急ぎアップします。誤字・脱字、単語の変な使用がありましたら感想等でお知らせください。いつも読んでいただいております。ありがとうございます。お気に入り登録もありがとうございます！

### 30・ハルと魔術師（2）

今度こそ夢を見なかった。

どこぞの王子に深い眠りに落ちるよう術を掛けられたから。多分、イルルージュの部屋でも強制的に同じ術を掛けたのだろう。せめて普通の魔術師はいないのかと、げんなり思う。

けれど、背中の傷は随分と良くなっていた。上半身に包帯が巻かれ、いつの間にか寝巻も薄紅色の上品な仕立てのワンピースへと変わっている。髪がまだ赤色ということは、急に大きな”式”を連続で使ったからオーバーヒート気味は継続中のようなだ。鳥に変わるように、髪の色を黒に見せかけることはたやすい。

「まあ、たまにはいいかあ……それにしても、何日くらい経ったのかな」

元々の髪の色は”燃えるような赤”。

のんびり言って、久しぶりにベットから抜け出した。なんとなく隣に一緒に寝ていたらしい、いびつなうさぎのぬいぐるみを抱える。懐かしいような、知っている香りがふんわりと広がった。

「リジーになんて言ったんだろう？ああ、そうだ。当面の生活費をどうしたら……夜も仕事しなきゃかなあ」

がつくりと肩を落とし、ドアノブを回す。  
そして。

「ハルツ！！！！」

目の前に王子様イルルージュが血相を変えて飛び込んできた。

「あ、おはようございます、イルルージュ王子。よかったです。顔色も良くなってるし、大丈夫そうですね」

咄嗟に、ほっ、と息を吐いてイルルージュに笑いかけた。

暗がりでもわかるほど衰弱していた彼を見たときは、心臓が止まるかと思った。確かに、肉が落ちた頬や体つきにその名残が見取れるが、今は赤みが差し、何よりも翡翠の瞳に光が戻っている。

イルルージュは瞬間的に顔色を赤く一変させ。

「あ……ハ、」

「バカ。女性の寝所に駆け込む紳士がどこにいますか。王子としての自覚以前の問題です」

「いたっ。あっ、ご、ごめんなさい……」

パコリと赤い頭を軽く小突く影。見上げると、絹の法衣を着たイルルージュ兄と目があった。いつ見ても美しい。

”強靱”で”忠誠”、”賢才”。この王国の誰もが知っている彼を称える言葉は数知れず。その後に続く”冷酷”で”冷徹”という

単語に彼が彼だということにすぐに結びつかなかった。

強いていうなら”特殊”。

さらに強いていうなら”冷美”。

イルルージュと腹違いの兄王子、側妃の子、”シュネーリヒト”。

”特殊”はきつと人知れず”魔術師”であることを指し。”冷美”、誰よりも綺麗な至宝のようなこのひとにぴったりだ。ひとつ疑問が残るけれど、まあ、この際、気にしないでおこう。きつとそれは彼らの”血”に関わるお家の問題だ。今現時点以上に関わりを持ちたくない。

す、とワンピースの端を摘み、膝を折る。

「シュネーリヒト王子殿下でいらっしやいますね。数々のご無礼、大変失礼いたしました。傷もほぼ完治しましたので、そろそろお暇させていただこうと思います。薬代とこのワンピースは後ほどお届けにあがります。それでは」

許される前に顔を上げ、いびつなうさぎをイルルージュに押しつける。ワンピースの裾を翻すように小走りにシュネーリヒトの脇をすり抜けようとして。

ひよい。

そんな単語がぴったりだった。

「のあつ!？」

「女性がそんな言葉使いはいけませんよ、ハル。まったく、油断も隙もありやしない」

あろうことがシュネーリヒト王子に抱えられた。いや、捕獲つて  
いうか。

華奢な外見なのに、意外に力強く大きな手に背を支えられ、体中  
がざわめく。

負けるな、自分。<sup>ハル</sup>

「今日こそ帰らないと!リジーに心配かけますので。っていうか、  
逃げないので下ろしてください」

「リジーにはちゃんと言いましたし、ご納得いただきました」

「ええ!？まさかシュネーリヒト王子殿下が自ら行ってくださった  
んじゃないですよ?っていうか、取り急ぎ下ろしてください」  
「行きましたが、それが?」

サラリと言われたとんでもない回答に、驚いて叫んだのはハルだ  
けではなかった。むしろ、まさかの事態にハルはついていけない。

「兄様!？」

「なんですか、イル。そもそもあなただつて勝手に抜け出して、こ  
れだけ人さまにご迷惑をおかけしておきながら」

「はい、反省して……いえ、それとこれは別です、兄様!」

「なぜです。100字以内で言ってください」

「100字以内ですか!？」

「数字は見逃して差し上げます。すでに7文字ですよ、イル」

仲良しだな、そんなことを悠長に思いながらハルは、この状態か

らの脱出方法を考える。

「……ハル」

不意に囁かれ振り返る。それは、いつもの甘い、からかうような声色ではなく真剣などちらかといえは冷たい声で。支えている手にも力が籠る。

至近距離に深い湖色の瞳が佇んでいた。

イルルージュは100字以内を遂行しようとしているのか、両手を折り開き唸りながら検査中でこつちのことなど気にしていない。その様子にハルは苦笑いした。

「まじめで優しすぎる王子様は嫌いじゃないです」

「私以外の男の好き嫌いなんて言わないでほしいですね。ですが、嫌いじゃないと聞いて安心しました」

「シュネーリヒト王子殿下？」

この冷美な王子が言わんとしていることが何一つとしてわからなかった。

「リヒトで結構です」

随分、短くなったな。いや、絶対無理だし。

「シュネーリヒト王子」

「リヒト」

「……リヒト王子」

「王子ではないと言っているでしょう？それではシュネーリヒトはいかがですか」

もつと無理。

「それでは……」

少し考察して、楽しそうにその声は告げる。

「おぼろ朧ならば構わないでしょう?」

わたしが黒髪を赤い髪に幻影のように見せられるように。  
わたしが赤い猫になれるように。  
わたしが赤い鳥になれるように。

この王子もまた。

シュネーリヒト謎の不審者だった。

### 30・ハルと魔術師(2)(後書き)

いつも読んでくださってありがとうございます。誤字・脱字等発見されましたらどこかからお知らせください。お気に入り登録ありますがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5225t/>

---

ハルとスーパ。

2011年9月20日18時30分発行